
御子神家の(非)日常

西乃 夕陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

御子神家の（非）日常

【Nコード】

N1978N

【作者名】

西乃 夕陽

【あらすじ】

古き良き日本では当たり前だった「神様」や「物の怪」の存在。科学が発展した現代でも、それらは決していなくなった訳ではない。むしろ自然に対する信仰心を失った現代人にこそ、彼らは時として牙を剥くのかもしれない……。

そんなお話を書きたいなと思って、なんでもない大学生岩戸佳佑と神社の娘である御子神三姉妹を軸に、物語を紡いでみます。

真夏の考察（前書き）

いわとけいすけ
岩戸佳佑：大学生

さかえこうへい
栄幸平：佳佑の親友

みこがみみき
御子神未希：上記二人の友人

真夏の考察

日差しが容赦なく打ち付ける。

白壁の巨大な建物がコの字型にそびえ立ち、まるで窓の一つ一つが睨みをきかせているようだ。その並んだ視線の先。とつてつけたような西洋風の石畳の広場の真ん中で、小さな噴水がぴゅーぴゅーと水を噴き出していた。

日本の夏は、暑い。アラブとかアフリカとか、日本人が灼熱地獄と考えている地域の人たちが日本にやってくると「日本の夏は暑い」と声をそろえると聞いた。

気温だけでなく湿度の高さも折り紙付き。さらには飽く事の無い蝉の声が不快指数を押し上げている。町の中に行けば、コンクリートの照り返し、背広の群れ、エンジン音の列、エアコンの室外機、電車の振動。

とかく、イライラには事欠かない。そりゃ誰が来ても「アツイ」訳だ。

町の中心からはやや距離のある大学の構内。噴水はその中に設置してある、わずかばかりの「涼」だ。だからこんな小さな水場にも、自然と人が集まってくる。

もちろん、岩戸佳佑もその中の一人だ。いや、隣にはもう一人、栄幸平がエビぞりになって、溜まった水に半分頭を突っ込んでいる。赤く染めた短髪がまるで怒ったワカメのようだ。

「何、してんだ」

「頭冷やしてる」

「だな。お前は少し、頭冷やした方がいいかもな」

面倒くさそうに答え、佳佑は空を見上げた。梅雨明けしたばかり

の青空は底抜けに明るく、今日も太陽の独壇場だ。

「佳佑」

腐れ縁の友人が、噴水から頭を引き抜いた。切れ長の目が、すでに死んだかのように虚ろな視線を投げかけている。

何の因果か中学校から同じ道をたどり、地元を離れた大学生活でもコイツが隣にいたり。「やるときゃやる」が口癖だが、佳佑を含め、友人たちの中で彼の本気を見た者はまだいない。

「ん？」

「何か面白い事ないの」

「お前の格好以外で？」

「俺のどこが面白いんだ。真面目にやれ」

「……。次の行政法の講義、先生が日射病で運ばれたから休講だつて」

「ソリヤオモシレーヤ」

周りには、淡々と流れる大学生の会話。中には幸平のびちゃびちゃの姿を見て引いている学生もいるようだが、聞こえてくる会話はバイトの話だとか、単位がどうのとか、普段から佳佑達が繰り返している会話と何ら変わりはない。このクソ暑い中、よくもまあそんな話で盛り上げられるもんだと、佳佑は少し関心してしまう。

何もする気が起きないとは、このことだ。

「佳佑君、幸平君」

律儀に幸平の名前まで呼ぶこの声。未希だ。涼やかで耳に優しいな、なんて思っていると、幸平はぱつと表情を明るくする。

「やあ未希ちゃん！今日も夏の暑さを吹き飛ばしてくれるねえ！」

佳佑には伝わるが、相手にはまるつきり意味不明な発言。どうも幸平は、頭で考えた心境を相手も共有していると勝手に思い込んで喋る癖がある。

案の定、未希は困惑した笑顔で佳佑を見る。それでも笑っているのが、この子の良いところなのだろう。

彼女には大和撫子という言葉がよく似合う。決して美人な訳ではないが、愛嬌のある整った顔立ち。最近の若者にしては珍しく、染めた事の無い黒髪を背中まで伸ばしている。そして物腰柔らかな姿勢。実際、彼女には着物がよく似合うと、佳佑は知っている。彼女はこの町で古くから続く神社の娘なのだ。

そんな穏やかな身なりとは裏腹に男子顔負けの荒事をサクツとこなしたりしてしまうから、「それがまたいい」という人と「アレは変人だ」という部類の男に分かれるところではあるが。佳佑にしても、一ヶ月前に幸平と巻き込まれたあの一件を経験しては、どちらに転んでもおかしくはなかったのかもしれない。

まあ、本人がどうとも思っていない事なので、これ以上考えない事にする。

「いいよ、コイツはいないものとして考えてくれて。暑さで壊れるから」

「え！壊れちゃったの！大変だよ幸平君！病院まで送って行こうか？」

これを本気で心配するのも、彼女の良いところ。まるで戦場でナイチンゲールを見つけた負傷兵よろしく、幸平の顔がにんまりとゆるんでいる。

「ああ、クールで送ってあげて。着払いで」

「どこに送りつける気だコラ！」

「あの世。涼しいらしいよ」

なるべく余計なエネルギーを使いたくなくて、佳佑は暑苦しいヤツから視線をそらす。

「講義？」

「うん、そうだったんだけど。ちょっと面白くて」

未希はこれからネタにされる人に、申し訳なさそうに含み笑いをして話し出す。

「ドイツ語の先生、日射病で倒れて運ばれちゃったんだって。それで休講になっちゃった」

大笑いする幸平を、遠慮なく噴水に突き落とした。

真夏の考察（後書き）

ご精読ありがとうございました。

学生食堂（前書き）

香華純夏^{こうげ すみか}：大学生

学生食堂

第一印象は「かつこいい人だな」だった。男の人を見てもあまりそういう風を感じた事が無い自分だが、岩戸君を見た時の感想は正にそれだった。

そう、今年の4月、親友に紹介してもらった時に抱いた感想。

別にタレントのような甘いマスクという訳ではない。ちょっとだるそう、なんとなく醒めた雰囲気纏ってはいるが、話してみると意外に優しく、しかも熱い感情が垣間見えたりする。つい調子に乗って話したマニアックな演劇談を真剣に聞いてくれた時は、少し感動すら覚えた。

彼よりかつこいい人なんてのは、この大学内にだって、探せばいくらでもいるんだろう。

……だからちよつと嫌な予感はいしたんだ。もしかして一目惚れなのかもしれない、と。

なんとなく意識をしてからは、もうダメだった。講義中、食事中、帰宅する電車の中、布団に入った時……と、なんとなく彼の事を考えては切なくなってしまう。

自分は、奥手だ。しかも引つ込み思案で人に遠慮する性格だ。道を反対から歩いてくる人がいれば無意識に譲るし、図書館でボールペンを力チ力チする人がいれば大人しく場所を変える。あのバスに乗らないと死んでしまうかもしれないという状況になっても、順番を譲ってくれと懇願されたら譲るバカかもしれない。

そんな自分に対し、コンプレックスに近い感情も抱いているのだが、未希あたりに言わせれば「それが純夏のイトコ」らしい。未希はいい人だからそう言ってくれてるんだろうけど。

恋愛経験なんかは、ほとんど無いに等しい。高校二年の時に物好

きな男子と一度だけ付き合ったが、彼から告白されて彼からフラれてしまった。

その時は、まあそれなりに好きだったし、だから付き合っていたんだけど、なぜだか本気の恋愛とは違うような気もしていた。彼はその気持ちを見透かしてしまって、私から離れて行っただろう。

けれど、今回は……いや、今回こそ気のせいであって欲しかった。親友の彼氏じゃ、ただでさえ臆病な私が手なんか出せる訳ない。

親友なら、二人が長く続くように祈れどまさか破局を望むなんて。しかも自分のこのちっぽけな片思いのために？

いや、そんなことを考えてしまう自分にも嫌気が差す。

いけないいけない。悩んだってしょうがない。それよりも、間近に迫った夏休みの旅行の予定と、その先に待ち受ける学園祭の演目を考えなければ。

「純夏！」

水を飲み干したところで、声をかけられた。この声は、未希だ。振り向いて、心臓が止まるかと思った。

岩戸君だ。

学生食堂（後書き）

ご精読ありがとうございました。

学生食堂 その2

学食の端っこで、何か思い詰めたような顔をしながらノートを広げる女子学生。親友香華純夏の姿を認め、未希は声をかける。

「純夏！」

「あ、未希……ッ！」

彼女は振り向いて笑うと、直後にひどく驚いた表情。未希の代わりに後ろの佳佑が、更に後ろの幸平を指しながら笑って答える。

「ああ、コイツなら気にしないでいいから。ちよつと頭冷やしただけだから」

「おかげさまですっげえ冷えた。お礼に、この前冷蔵庫から発掘した2年モノの納豆でもごちそうするわ」

「なんだよ、水も滴るなんとやらだろ」

「大事なところを思い出せやコラ」

相変わらず佳佑と幸平の漫才は聞いていて飽きない。

「どしたの？あ、演劇部の？」

確か学園祭ではミュージカルをやるとか。

純夏は本を読むのが好きで、自身で小説を書いたり、それを元に劇の台本を作ったり、しかもその演出のレベルが高いらしい。友達づてに聞くところによると、入部の頃から才能を見抜かれて脚本を任されたらしいが、本人は先輩に遠慮して断ったのだとか。ネタノートを堂々と広げているところを見ると、どうやら二年目であろうやく踏ん切りが突いたみたいだ。

「そ、そうだよ。夏休みなんてあつという間だから、今から考えとかないと……」

「へえ、台本書くの？すごいね。どんな話なの？」

純夏の向かいに座る佳佑。心無しか、純夏の背筋がピンと伸びた。純夏は、お世辞にも男性への免疫があるとは言い難い。

彼女は大学に入ってから友人だが、初めてあつた時から未希と馬が合った。未希からすれば、純夏の少し引つ込み思案で控えめなところを可愛くて羨ましく思っている……のだが、当の本人はコンプレックスにさえ感じている。

少し茶を入れたセミロングの髪は彼女のうなじを隠す程度の長さで、遠慮がちな長さも彼女らしい。知的な光を称えた黒い瞳と、それに拍車をかける縁なし眼鏡。

どこか儚げで知的な香りを漂わせる雰囲気、体育会系の未希には本当に羨ましかった。

さぞかしモテたんだろうと思ったら、本人に聞くとあまり恋愛経験は無いと言う。どうして男どもはこんな知的美人を放っておくのだろうと怒ってしまったが、純夏は静かに笑うだけだった。

に、しても純夏が困ったような顔をしているので、未希が助け舟を出す。

「佳佑君、今ネタばらしできる訳ないでしょ？学園祭で上演するのに」

「あ……そりゃそつか。ゴメンゴメン」

苦笑いする佳佑。ぎこちない笑顔を返す純夏。ため息をつく未希。少しだけ、積極的になってもらってもいいかもしれないな。

学生食堂 その2（後書き）

ご精読ありがとうございました。

夕暮れの神社

太陽も傾き、暑さもだいぶ治まってきた。それでもＴシャツの中を泳ぐ風は多量の湿気を含んでいて、まるでぬるいゼリーでも纏っているような不快感が離れない。

石段を上る足が重くなる。

「元気だな……」

先をさつさと上る末希を見上げ、大きく息を吐き出す。

「だらしないなあ。たいした段数じゃないよ？つてか、ウチは神社の中でも低い方なんだから」

「段数はそうかもね。けど、すでに登山してるからね。階段のスタート地点が山の上だからね」

「はいはい、山頂の山小屋ですいませんでしたね。……たたくもう、オーバーだなあ」

末希はもう投げやりのため息をついて、右手を差し出す。

「……む。おなごの手など借りん。ワシにも意地がある」

日本男児として、さすがに女の子に引っ張ってもらって階段を上る訳にもいくまい。

「じゃ、早く行こ」

軽やかに石段を上って行く末希。さすがに現地人は違う。それを見送ってから、佳佑は振り返る。

立ち並ぶ木々の間から、赤く染まった海が見えた。

町の中心からはやや外れた、海を臨む小高い丘。丘と呼ぶにはやや標高があるその中腹の窪地に、由緒正しき十或神社が存在する。津波でも崖崩れでも逃げられないな、と言ったら怒られた。

ヒグラシに急かされてようやく石段を上り終えると、さして大きくもない鳥居が迎えてくれる。俗世との境界を示すために在るそう

だが、その先の暑さと湿気も残念ながら俗世と変わらない。

鳥居をくぐってすぐ、神社に行くと必ずある「手を洗うところ」で柄杓を取る。冷たい水を口を含み、喉を鳴らすと生き返るようだった。

この手洗い場、手水舎てみずやという名前だと、未希に教えてもらった。年期の入った石の裂け目から突き出た竹をつたい、飽きる事無く水が湧き出ている。現代では水道水に変える神社も多いらしいが、ここは水が奇麗だからと未だに湧水を引いているのだそうだ。

確かにこの町は、ちよつとした水自慢で有名だ。戦時中の空襲を免れた旧い街並を歩くと、張り巡らされた用水路を澄んだ水が勢いよく流れていたりする。それを利用してスイカを冷やしている様は、大都会ではお目にかかれない日本の古き良き景色だろう。

佳佑は、そんなこの町が好きだった。

「あゝ生き返る……」

和んでいると、夕闇を割って声が飛ぶ。未希はもうだいたい先にいるようだ。

「佳佑君。そんなところでボーツとしてると、蚊に刺されるよー」

それは嫌だ。名残惜しいが、その場を離れる事にした。

石畳の参道が中央の社殿まで真っ直ぐ伸びている。

未希との出会いは、この神社だった。社殿の脇の建物でお守りを売っている巫女さんなんて、みんなバイトだと思っていた。それが本当に神主さんの娘だとは。

その巫女さんですら、正確には神職ではないという。未希はまだ神職の位に無いが、人手も無いからいろいろな権限外の事まで教えられてやっているらしい。

本来ならば神主の資格が取れる大学に通った方が良いのだそうだが、父親が「そんなもの後でどうにもなるよ」とお気楽に言ってくれたため、地元の大学の歴史学科に通って日本の歴史を勉強しているんだとか。

ここにはいろいろと知らない世界があつて、佳佑には新鮮だった。古い社殿の奥に隠れて、立派な民家が建っている。年代物が並ぶこの敷地の中には不釣り合いな新しい一軒家。未希の実家、御子神家だ。

夕暮れの神社（後書き）

ご精読ありがとうございました。

最後に星を付けてお帰りいただけるとありがたいです。

御子神家の食卓（前書き）

御子神 みこがみ 美娜 みなぎ：御子神家長女
御子神 みこがみ 穂波実 ほなみ：御子神家三女

御子神家の食卓

「いや、またお呼ばれしちゃって……どーもすみませんねえ」

愛想笑いを浮かべながら後ろ頭をかいてみせる佳佑。

「私は構わんよ。男手があつた方が、何かと助かるからな」

さばさばとした男性的な物言い。この神社の正統な跡取りである御子神美柰は、佳佑の事を気に入っているようだった。

佳佑とは年が6つ離れている。濃い栗色の髪を無造作にポニーテールにしており、服装もシンプルで全体的に飾り気が無い。誰が見ても文句無しの美人で、笑っていれば男には困らないはずだ。ただ笑ってさえいれば。

「それに末希のお気に入りでは、私が断れる理由も無からう？」

楽しそうに、しかしどこかサディスティックな笑みを佳佑に向ける。この人の趣味は、突かれて痛いところを突かれた人を観察する事だ。

今のだって、夕食の準備で忙しい末希ではなく、目の前にいる佳佑に向けられた「妹はお前に、異性として好意を抱いているぞ」という意味合いの言葉なのだから。

ひどい時にはネチネチといたぶられるが、なかなか的を射た発言もあって、その意味では佳佑は一目置いていた。要は人を掌で転がすのが好きなのだ。

何やらいろいろと怪しい研究に没頭しているようでもあり、謎の多い人物でもある。

「もつとも、穂波実ちゃんはそうでもないようだがねえ」

普段は妹をちゃん付けすることはない。明らかに相手を挑発するために付いた「ちゃん」。意地悪に歪んだ長女の笑みは、テーブルの向こうに座るセーラー服の少女に向けられる。

三女、御子神穂波実。末っ子の彼女はまだ高校一年生だ。おろしたての夏服が目眩しい。

あどけなさが色濃く残る顔立ちだが、二、三年後は歩くだけで目を引くような女の子になるに違いない。

頭の両脇でまとめた長いツインテールが跳ねて「m」の字に見える。ので、いつだったか某ハンバーガーチェーンのマークみたいだね、と言ったら、生まれて初めて明確な殺意を向けられた。この子も笑ってさえいればモテるはずだのだが……。

穂波実とは姉二人とは対称的で、あまり感情を表に出さない。幼い頃に母を亡くしたから、という辛い過去のせいもあるらしいのだが、特に佳佑に対しては、涼しげ……というか冷ややかな視線を刺してくることが多い。

美柳に言わせると、不在がちな父親と長女に代わって次女の未希が主に面倒を見てきたためで、つまり穂波実とは生粋のお姉ちゃん子なのだ。

だから、あの一件以来ちよくちよく御子神家の食卓に顔を出す佳佑に、姉を取られるという危惧??それは「誤解」だが??を少なからず抱いている。ただでさえ感情を表に出さない鉄のカーテンは、今日も開く気配さえ無い。

「ほ、穂波実ちゃん、夏服似合ってるね……えーと、モテるでしょ？」

久々にあった親戚のおじさんみたいな言葉は、ぷいっとそっぽを向く事で無視された。

そんな空気を楽しんでいるのは声を上げて笑っている美柳だけ。本当に人が悪い。

「穂波実、着替えて来たらどうだ。制服に醤油でも跳ねたら目も当てられん。それに、セーラー服に秘められた魔力を侮るな。人畜無害に見える岩戸と言えど、欲情すれば何をするか分からん」

「俺が穂波実ちゃんに何をするんですか！」

穂波実はいつも通り、そつと言葉を紡ぐ。

「いい」

いろんな意味で、拒否の「いい」だ。

「穂波実、醤油の威力をなめてはいけない。女性には醤油顔はないんだ、クラスでいじめられるぞ。明日からあだ名は醤油魔王だぞ。今までお姫様だったのが、急に魔王に配置転換だ。勇者どもも手のひら返すぞ。お姫様に生活臭は似合わんからな。まあ、強者になびくのは人間の性ではあるが」

「せめて醤油女王にしてあげて下さい。てか、シリアスな顔で妹になんて事言ってますか、あなたは。もはや意味分かんないですし」

「私は魔王よりの人間だもの」

「なんのカミングアウト!？」

美柰は、佳佑とのやり取りが楽しいらしい。ずっと含み笑いを浮かべている。

佳佑とて、嫌なのに無理に訪ねて来ている訳ではない。

アパートに帰ってコンビ二弁当を淋しくビールで流しこむのと、こっちにお呼ばれするのでは天と地の差だ。……穂波実には迷惑かもしれないが。

「ゴメンね、佳佑君。もうちょっとでできるから」

忙しく動き回る末希が食卓に戻ってきた。エプロンで手を拭く仕草が様になっている。

「あ、おかまいなく。俺は勝手に呼ばれて来たただだから」

「そうだね」

「穂波実ちゃん、そこだけは同調してくれるんだね。全然いいよ、俺は。俺との会話に参加してくれた事が、俺は嬉しい」

「はいはい、姉さん、食器並べるの手伝って下さい。穂波実、着替えて来なさい。ソース・オブ・デスになりたくないでしょ？」

「醤油魔王より全然かつこいいし！見た事無い全体魔法使えそうだし！つーかこの姉妹の会話なの、これ。え？なんでそれで着替えに行くの？そんなに嫌だった？ソース・オブ・デスが？」

この個性の強い三姉妹は、それだけで終わらない。この世には知らないことがたくさんある。

佳佑だって知らなかった。日本はそんなに平和じゃなくて、数で自然を圧倒する人間にも確かな天敵が存在するなんて。

御子神家の食卓（後書き）

ご精読ありがとうございました。

独り言

最初の計画は予定通り動いた。

いくらか数に任せて攻撃させたとは言え、やはり唐傘ごときではあの神社を止める事は出来ないだろう。

想定内だ。次の刺客はすでに動き出している。

手駒は今のところ二つ。連中を倒す駒としてはやや力不足だが、力を引き出す役割くらいなら十分演じられるだろう。

それに……この程度で倒れられては、こちらとしてもやりがいが無い。ある程度は抵抗してもらわなければ、力を引き出せない。

家畜は太らせて脂が乗ったところを喰った方がうまい。いやこれは人間の考え方だったか。

独り言（後書き）

ご精読ありがとうございました。

Ｔレックスとトリケラトプス

私は、キッチンに準備してあった皿を適当に持って来て、面倒なので積み重ねたままテーブルに置く。

客人である岩戸は、する事も無くなつてテレビを眺めている。

三年前に立て替えたごく一般的な一軒家。神社は古いが、家ならその辺の家屋よりずっと立派で新しい。リビングに置かれた大きな液晶テレビは、バカ親父がパチンコで獲得してきた景品だ。

ニユースは隣の市で起きた殺人事件を報じる。私も、する事が無いのでそれを流し見る。

一週間と三日前から、次々と三人が殺された事件。

顔が分からなくなるほど角材でめった打ちにされた少年、ナイフの一突きに倒れた青年、そして強姦の果てに絞殺された若い女性。

被害者にも手口にも共通点は無く、三つの殺人の関連性は分からない。しかし、地方の地方都市で連続して起こった殺人事件をマスコミが放っておく訳も無く、勝手に「連続殺人」に仕立て上げて大騒ぎしている。

元警視庁捜査一課長という肩書きを持つ、白髪まじりのコメントーターが真面目な顔で語るところでは、犯人を単独犯とするならば『異常性格者』で『支配欲がとても強い男性』らしい。……そう思わない人はどうかしている、と言われても仕方ないほどつまらないコメントだ。きっとコイツは二度とテレビの仕事は回ってこないだろうと、同情を禁じ得ない。

「実にくだらん。これで金が貰えるのか。楽な仕事だ」

退屈を通り越して、あからさまな侮蔑を含んだ感想を画面に吐き付け、煙草をくわえる。……む、私とした事が、ライターはどこへやったのだったか。年を取るとこれだからいけない。

「岩戸、人はなぜ人を殺すんだと思う」

ちよつと試してみよう。

「え……？」

「なんで怯えた目で見る。私をなんだと思ってるんだ」

岩戸佳佑はごまかすように笑顔を張り付け、微妙に体を引いている。

「いやあ、もう殺ってそうな美柳さんがそう言う事言つと、嘘に聞こえないから……」

「長生きしたくないのか？」

「したいです。この世にまだたくさん未練あります。ええ。

……そうですねえ、憎しみ、憧れ、妬み、衝動、快楽……こんなところですか？」

「確かに、感情が引き金になる殺人は多いだろう。だがそれは二次的な物だとは思わないか」

妹のお気に入りは少し悩んだ顔をした。

「……どういふことです？」

「もつと根本的なところで、人は思い違いをしているんじゃないか、ということさ。世界広しと言えど、ある程度の図体を持っていて、しかも六十億以上の個体数を誇る生物はヒトだけだ。恐竜だってそこまでは繁栄していなかった。

そもそも恐竜とひとくくりにしてしまいが、それも私は気に喰わない。だってトリケラトプスとティラノサウルスでは、どう見てももはや別の生物だろう。は虫類というくりなら納得もできるがね」

まあ、それは関係なかった。が、口を開いた彼はにやりと笑う。

「もしかして、増えすぎた人類を生物としての本能で駆逐している

とか、美柳さん、柄にも無くそんなこと考えてませんか？あの、ウィルスはヒトの数を抑えるために産まれて来たんだ、みたいな」

一見ちゃらんぼらんに見えて、なかなか鋭いところを私は気に入っていた。訳の分らないところから始まった話なのに、ちゃんと本質は捉えている。未希も面白いヤツを見つけて来たものだ。いや、始まりは彼からここに来たのだったか。

「柄にも無い、か。そうかもな。だが、そう考える輩の気持ちも分からんでも無い。自らの意に反する衝動として人を殺し、その後で理由を取ってつけることで、ヒトとしてのカタチを保つ、というようなことかな」

「それなら、世界はもっと平和か、もしくはとつくに滅んでるんじゃないっすか？ヒトはもう、地球だって滅ぼせるんですから」

岩戸の言う事は半分正しい。確かに、殺人衝動が自分以外から来るなら、それを理性で押さえ込むのもヒトが人たる所以で、負けた人間はもう人には戻れないのかもしれない。つまり、後付けの理由では自分を正当化する術を持たず、衝動に負け際限なく殺し続けるのだ。

……だが、今までそう言ったケモノのような殺人犯は出現していない。むしろ、過去に恐怖の連続殺人鬼として歴史に名を連ねるような連中こそ、かえって強烈な自我を持っていたりする。

だが、半分は外れた。人間は人間を滅ぼせるに過ぎない。飽きずに戦争を繰り返しても、地球規模の異常気象を起こしても、核でヒトが絶滅しても、この地球上に人より後を生きる生命体は必ず残る。それが人から見ればどんなに矮小な生き物でも、どんなに原始的な単細胞生物でも、彼らは必ず復活する。

あくまで『地球』を滅ぼすのは、宇宙の果てから飛来する隕石で

あり、果てない時の流れの果てにいつか膨張する太陽なのだ。意思の無い無機質な意志故の、考える輩など鼻で笑い飛ばす力。……人はそこまで尊大ではない。

彼と話しているつもりで、ただ自分の考えを整理していただけのようだ。

「感情が二次的なモノだとすれば、人としての存在意義とはなんなのだろうな……」

火をつけないままの煙草を口にくわえ直すと、岩戸は嫌みでもなんでも無く、ただ清々しく笑った。

「美娜さん、考え過ぎ。頭がいい人はそこが良くない。……じゃあ、いいじゃないですか。二次的でも」

「興味深いな」

彼はえへんとわざとらしく咳払いしてみせる。

「もし本能がやつちまえて言うてるんなら、それが例え本当の間でも、ヒトには理性があるし、感情もあります。反対に人を好きにもなれるし、人間は戦った相手の墓だつて作れちゃう。

衝動に負けた人間なんて、生きてる人間の何分の一もないじゃないですか。数えた事はありませんけど。じゃ、それでいいじゃないですか。衝動に負けないようにまっとうすれば」

「それが人類の破滅に向かう道でもか」

「一人一人の積み重ねで破滅に向かうなら、そうじゃなく積み重ねていけばいいんです。俺はそれができると思いますよ、人間なら」

実に真っ直ぐに、恥ずかしげも無く言い切る。なるほど、世間を知らない若者らしい意見だ。

困ってる人には手を差しのべればいい、互いが互いを思いやれば良い、人が下降線をたどるならそれを上げる手段も持っているはずだ、という事か。

果たしてそれが5年後にも言えるかどうか……楽しみが増えた。できれば私のような歪んだ考えは持つて欲しくない、と切に願う。

「いいだろう……。つまらん話に付き合わせた。飲め」

ちやっかり冷蔵庫から持つて来た缶ビールを開け、グラスに注ぐ。
「あざーす！」

調子よく笑つてグラスを受け取り、注ぎ返してくる。

やっと新聞の下にライターを見つけ、火をつけ……。ぱつと横から取り上げられる。未希は取り上げた煙草を、もうグリグリと灰皿に押し付けた。

「あああもつたいない」

「姉さん、リビングは禁煙です。穂波実だつて居るんだから、氣をつけてつて言つてるでしよう？」

「やれやれ、未希には適わんな」

「つてか、聞こえたんですけど。また縁起でもない話してたでしょう？どうして食事前にそういう……」

昔からエグい話が苦手なしつかり者の妹は、思いきり顔をしかめる。

「そう言うな。お前の代わりに佳佑を試してるんだ。どんな人物かちゃんと知っておかなければ、将来不安だろうが」

「な……な、に、が、ですか……！」

途端、火を噴きそうな顔で皿をひつたくり、黙つてテーブルに並べ始める未希。横顔が赤いのは照れからか怒っているからか、それは氣にも留めない。一方のお氣に入り君は、素知らぬ顔でニュースの話題を振ってくる。

「まあ、そういうことだ岩戸佳佑君。……では、穂波実も戻つて来たところで、未希お手製のハンバーグをいただきますか」

「レックスとトリケラトプス」(後書き)

ご精読ありがとうございました。

水飴

あれは梅雨明け直前の陰鬱な雨の日だった。

純夏は大学の授業を終え、アパートに帰宅する途中で、男と出会った。

あまり高くもない堤防の上を這うような道。アパートまですぐ近くのこの道が純夏は好きだ。晴れた日にはのんびりと散歩すると、いろいろといいアイデアが浮かんでくる。

百メートルほど先の対岸には小さな山があつて、緑が広がっている。緑化活動に積極的なこの町だが、やはり本物の自然には適う物ではない。

普段は水位の低いこの川も、今は雨が表情をすっかり怒りに変えてしまっていて、とても近寄る気にはならない。夏には親子連れが遊べるような優しい浅瀬が広がるのだが。

そして、今時の若者には似合わない黒い傘をさし、純夏の道を塞ぐでも無くただ佇む若い男。

男は中性的な雰囲気を纏っていた。一瞬、女性かと思ったほどに彼は綺麗な雰囲気している。だが、彼女は、どうしても彼の顔を思い出せない。

イメージは白。漠然と思った。

「こんにちは」

その涼やかな声で、ああ彼は男なんだ、と他人事のように気がつ

いた。

もともと人通りは多くない上に、今日は雨だ。道行く人は二人以外には居ない。いや、人通りがあってもやはり二人きりになったのではないか、と純夏は考える。いつの間にか、思考はぼんやりとしたものになっていった。

不思議な雰囲気。一言で言えばそんな有りふれた言葉になってしまふ。

「こんにちは」

男はもう一度言つて、ひどく儂げな笑顔を浮かべる。ドキツとした。佳佑に対する胸の高鳴りとはまったく質が違ふ。しばらく見つめ合つた後で、彼女はかすれた声を絞り出す。

気付けば随分と息苦しい。場を支配する湿気が、突然形を持つて純夏の喉に詰まつたかのようだ。

「あなたは、誰……」

「人ならざる者、ではあるだろうね」

それは矛盾している。『人』と『者』は同じ意味じゃないの？

「ボクが誰だろうと君にはさほど重要じゃないだろう？」

確かに。この異常なシチュエーションだけで、十分常軌を逸している。彼が誰なのか知らない方が、もしかすると幸せなのかもしれない、とさえ思えてしまふ。

「望むなら力をあげる」

胡散臭いセリフ。しかし彼のそれは砂糖をたくさん含んだ水飴のように甘くて、それだけで純夏は溶けてしまいそうだった。こんな経験、おそらくこれから先も一度だって無いだろう。

「君の想いは辛く、永い責め苦。なぜなら、そのままの君では叶う事は無いから。未来永劫に」

それは単純で、分かりきった説明だった。

「だが、君は我慢するんだね。今までのように殻に閉じこもっていれば、傷つかずにやりすごせるから。違うかな？」

につこりと笑う。否定を許さない力を感じ、頭がとても熱い。

「それもいい。君の人生だから。……しかし。変える事を望むのも、生命が生命たる業。人はその業が特に強い」

口が渴く。白い青年以外の景色が歪んで見えて、もう立っているのか座っているのかも分からない。

「君が領けば、力は君の物だ。僕が上げるんじゃない。君が手にする」

そんなもの、詭弁だ。が、それが、どうした。
声がわんわんと響く。

『君と彼を遮るもの。断ち切る力。君がそれを手にする』

『君が気付いている、君の中の念。それは君が放つ』

『君のかけがえのない……大切な……この上なく、邪魔な存在』

続きは言わないで欲しい。純夏は最後の理性で心からそう願ったが、青年はいとも容易くそれを口にした。

「君の念に従って殺せば、いい」

頷く純夏。

「承知した。力は君の物だ」

一瞬、イメージが白から金色に変わった気がした。

水飴（後書き）

ご精読ありがとうございました。

それは、まるで始めから居たかの様に

なんて簡単なこと！
こんな簡単なこと！
やはり人は脆い！
知ってしまった！
快樂に次ぐ快樂！
もうやめられない！

????????????????

ぞくり。

「???ッ!」

突如訪れた悪寒と身震いに、私は思わず二の腕を抑えていた。

まただ……。

右腕が勝手に暴れ出しそうな、ここのところそんな不気味な感覚が不定期に襲ってくる。

何かが私の体の中で頭をもたげ、叫んでいる。何を言っているのか、よく聞こえない。

聞こえない？聞きたくない？

「純夏？大丈夫？」

はっとして横を見ると、未希が心配そうな表情をしている。

「調子でも悪いの？」

「う、ううん、全然。大丈夫よ」

慌てて取り繕うが、未希は納得しない。

「そう？でも、思い詰めたみたいな表情だったよ？悩みでもあるの？私でよければ聞くよ？」

「ちよつと、台本の事考えてたから。最近、懇詰め過ぎなのかも」とつさであれ親友に嘘をつくのは忍びないが、自分でもよく分からない事を人に説明なんかできるはずもないし、余計に頭を疑われるのが関の山だ。

だが。

この黒い感情は何なのだ。親友という時に限って暴れようとするこの私の右手は、何なのだ。

「でも、顔色よくないみたい」

それはそうだろう。実際、お世辞にも気分がいいとは言えない。

「うん、そうかも……。未希、今日は帰って休むね」

「そうしなよ。次の講義は代返しとくから」

「い、いいよ。そういうのはちよつと……」

確かに、次の講義の講師はこまめに出席を取る人だが……。

「真面目だなあ、純夏は。大丈夫だよ、せこせこ出席なんか取る授業にロクなのないから。こつちも適当にやってればいいの！面白い講義なら、出席なんか取られなくてちゃんと毎回出るよ」

「そ、それはむちゃくちゃだよ……。じゃあ、ごめんね」

「ゆつくり休んで！」

わざと元気いっぱい手を振る未希から離れ、小さな黒い感情を殺そうと努力する。今はまだ小さな黒いシミ。けれどそれは、インクが布に染み込むように、間違いなく広がっている。

いったい私の体に何が、起こっているというのだ。

それは、まるで始めから居たかの様に（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

道場にて

御子神家には、古い道場がある。先々代？？つまり未希の曾祖父にあたる人が熱心な人で、わざわざ敷地内に剣道場を作って近所の子どもをすごいたとか。孫である未希の父親もずいぶん厳しく教えられたらしい。

父親は祖父の死をきっかけに辞めてしまったが、その子どもの未希は幼い頃からここで竹刀を振ってきた。正確には穂波実が生まれ、母親が亡くなってしばらくしてから、だったか。

御子神家の者は、生まれつき霊力が人より強い。一般には霊感などと呼ばれて、「人には見えないものが見えてしまう」程度のもんだが、力が強くなりすぎるともはやその範疇を越えてしまう。

もちろん未希も一般人に比べれば圧倒的な霊力を持つてはいる。しかしやはり美娜や穂波実に比べてしまうと、だいぶ劣るのが現状だ。

特に穂波実は百年に一人の逸材とかで、このまま成長して力の使い方を覚えれば日本屈指の祈禱師になれるらしいが、こればかりは先天性の才能なので、未希の努力ではどうしようもない。

そんな三姉妹の次女という立場。母親が早くに亡くなって。全国行脚で不在がちな父と後継者修行に精を出す姉に変わり、未希が家の切り盛りをしなければいけなかった。幼い未希はそれを理解していた。そしてまだよちよち歩きの穂波実を守らなければならない事も。

『人を守る力としての霊力』が弱い事を恨みもしたが、彼女は自らを鍛える事で御子神家を支える役目を選んだ。

何やらそっちの才能はあったようで、いつの間にか体育祭で男子

に負けないタイムを叩き出したり、剣道3段だったり、様々な流派の剣技を勉強してみたり、挙げ句ぶんぶんと真剣を振り回して特訓したり、おおよそ普通ではないことになってしまった訳だが。

おかげで中学校の時には、学校を仕切っていた番長と大乱闘の末にぶちのめし、図らずも天下をとってしまったことがある。

「女の子らしい、趣味とか、ないんですか、私は！」

夕陽の差し込む道場で素振りをしながら、ぶつぶつと呟く未希。その素振りは様になっていて、一つ一つの動きに無駄が無く、正確だった。

なるべく大和撫子であるように気をつけて来たつもりだが、気がつくことやけに所帯染みた買物をしていたり、いつの間にか大学生だったり、もう随分長いこと彼氏もいなかったりしている。

「生け花とか、茶道とか、やれば、良かったかな！」

一応うら若き乙女として、恋から遠ざかっている訳ではない。気になる人は最近できた。何か進展がある訳ではないが、少しずつ打ち溶けていっているような気はする。

それだけで嬉しいんだから、人間ってのは不思議だなあ、と思う。

知らず、気分が高揚していく。

木刀が空気を切る音が、なんだかんだと言いながらも未希の思考を研ぎすます。

やがて目の前にぼんやりと輪郭を形作る人影。ふうつと息を吐いて構えを正す。

ぴんと伸ばした背筋。それは頭の前から糸で吊るされたようなイメージ。それでいて緊張しすぎず、昂りすぎず。剣の束は握りこぶし一つ分だけ腹の前に。切っ先の延長線は相手の喉元。

基本にして最強、正眼の構え。……呼吸を、止める。

小さく静かに、摺り足で距離を詰める。自分と相手の間合いを測りながら。

頭ではなく体が、互いの必殺の距離を感じる。その瞬間。

「……やああああッ！！！」

強烈な気合いとともに踏み込んだ未希の木刀が、中空を漂う幻覚を真つ二つにした。

ふうつと一つ息を吐く。

と、拍手の音。

「ふえ？」

今の今まで一人だと思っていた未希の、虚をつかれた間抜けな声が道場に響いた。

「すつげえな。見てる俺が緊張したよ」

道場の入り口で両手を叩くのは、岩戸佳佑だった。

「け、佳佑君……？いつからそこにいたの？」

「なんかぶつぶつ言ってたあたりかな？それにしても、すつごいな。剣客って感じだよ、未希。俺、思わず見入っちゃったもん。道着姿も様になってるし。やっぱ和服似合うね」

未希はぼかんとした表情で佳佑を見つめる。

聞かれたかも。めちやくちゃ恥ずかしい愚痴を佳佑に聞かれたかも。

未希の顔が夕空に負けないくらい真っ赤に染まって行く。知ってか知らずか、佳佑は能天気な素振りの真似をしながら、

「俺も野球やってたから分かるけど、今のを横のスイングにしたら楽にバックスリーンまでドカーンと……どした、未希？熱でもある

のか？」

「な、なんでもない……」

「そう？調子でも悪いんじゃないの？おいおいあんまり無理すんなよ」

靴を脱いで上がってくる佳佑。未希は慌てて両手を突き出す。来ないで、のポーズだ。

「い、いいから、大丈夫だよ。なんともないってば」

「このクソ暑いのに気合い入れ過ぎなんだって。少しは加減しなさいって」

「そ、それ以上近寄らないで！」

「なんで」

なんでって言われても。さっきまでアナタのこと考えてました、なんて死んでも言えない。なんでこの人はこんなに人の心にずけずけと……。

目をそらして絞り出した言い訳は、

「……あ、そうだ。汗臭いから。ね？」

「バーカ」

「あう……ひどいなあ……」

一蹴。

「俺は汗臭いプラス超男臭い高校球児だったっての。いや、ありゃあ男が集まりすぎて腐ったような臭いだったな。ってか、今思えば女子マネージャーってすげえな。あんな淀んだ空間に居られるんだから。……ほれ、やっぱ熱あんじゃないかね？」

それは、なんてことなく私の額に手を当てる佳佑君のせいなんですよけど、と未希は思う。それとも女の子としてすら意識してくれていないのか、とも。

「ちょーずや行くぞ。冷たい水は生き返るぞ」。ま、本当はビールの方がいいんだけど」

にっと笑って手を引く佳佑。

うん、こんな簡単に心を乱しまくるとは、私もまだまだだなあ……。

道場にて（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

穂波実視線

「最近、純夏の様子がおかしいような気がするんです」

姉は、一番上の姉に対してなぜか敬語を使う。妹である私にはそんなこともないし、友人に対してもフランクな言葉遣いだ。

ともかく、未希の表情は浮かない。テーブルに頬杖をついて麦茶を煽っている。反対側に座る美柰は、煙草を指で弄びながらちらりちらりと未希を見ている。ダメですと目で返答され、不満そうにケースに戻した。

「様子がおかしいと言われてもな。体調でも悪いんじゃないのか」
「それはそうなんですけど、それだけじゃないっていうか」

未希の話は要領を得ない。本人もその辺が漠然としている、と言った様子だ。

香華純夏と言えば、未希の同級生だったはずだ。何度か見た事がある。知的な眼鏡のお姉さんで、大人しそうな雰囲気の人だった。

「ならば医者の出番だな。私ら神職の専門ではないだろう。穂波実、私にも麦茶をくれないか」

煙草から団扇に持ち替え、つまらなさそうに美柰。興味の無い事には徹底的に興味を持たない人なのだ。

麦茶を注いで渡すと、実においしそうに喉を鳴らして飲み干してみせる。コマーシャルに起用すれば、かなりいい線を行くのではないだろうか、と思う。

「たまらんな。ビールもいいが、麦茶もいいな、うん。もう一杯くれ」

よく分からないことで一人納得し、綺麗な笑顔で笑う。姉妹ながら、普通に笑うと本当に綺麗な人だと思う。

ここ数年、神職の資格のために遠くの大学に通ったり、帰って来
たと思ったら「修行してくる」なんて簡単に言っただけに出かけ
てしまったり、あまり家に居てくれた記憶が無い。そう言えば、こ
の前お土産にくれたのはどこかの国の年代物の人形だった。……本
当に修行に行っていたのだろうか。

「後はほら、故郷の両親とケンカした、なんていい線じゃないか？
大学生なんてやんちゃしたくなる年頃だろ。学生という殻に守られ
た社会の屑だからな。学生特有の、俺はなんでもできる、みたいな
勘違い開放感が……」

「すいませんでしたね、現役の社会の屑で。姉さんも数年前は屑だ
ったんですね。でも今は立派すぎる社会人ですもんね。私も先行き
が安心でしようがないです」

「……」

私は、母の顔すら覚えていない。私を産んですぐに他界してしま
ったらしい。写真の中で微笑む母親はとても優しく、姉妹の中
では未希に雰囲気似ている。

そしてあのバカな父の事は……考えたくもない。今も出張と称し
てどこかで遊び歩いているに違いない。

「なんだか、私に対して冷たいような気がするんですよね……」
そんな訳で、4つ離れた未希が私の母親代わりであり、友達であ
り、大好きな姉だった。だから未希の表情が浮かないと、私も楽し
くない。

「なら、簡単だ。未希が、香華の氣にくわない何かをしたんだろう」
にべもない言い方が美柳のいいところでもあり、悪いところでも
ある。

「とも思っただんですけど、何も言っただけはまずなんですけどね」

「未希。人付き合いはそんなに簡単なものじゃない。本人が直接言わなくても誰かから伝わる事もあるし、根も葉もない勘違いとか思い込みの噂が一人歩きしている可能性だってある」

「そりゃそうなんですけど。全然思いあたらない……」

べたーっと溶けたアイスのごとくテーブルに実を預ける未希。なんだか可哀想になってくる。

「お姉ちゃんはきつと悪くないよ。お姉ちゃんが悪い訳ないもん」
我ながら根拠も何も無いが、これが私の正義だ。

「ありがとお、ホナミン」。私の味方はアナタだけだよ」

「お姉ちゃん、嬉しいけど、ちょっと苦しい……」

むぎゅーっと抱きしめられると、美柰が冷ややかな視線を向けてくる。

「お前達、仲がいいのは結構だが一線は越えるなよ」

「あの人の言うことは8割戯れ言だから聞かなくていいよ」、穂波実

美柰は軽く笑ってから、ずっと真面目な表情に戻る。まるでスイツチを切り替えたように、突然変わるのが美柰のすごいところだ。

「さて、未希。香華女史のことだが。前々日は変わった様子も無く普段通りの彼女だった、と言うが」

冷凍庫からアイスを取ってくる未希。

「そです。なぐんにも、変わった様子はなくて。穂波実も食べるでしょ？」

「うん」

未希が差し出す箱の中から、いつも通り赤い色の円柱形が付いた棒を選び出す。

御子神家でアイスと言えば、このフルーツアソートのアイスキャンデーのことであり、美柰はグレープ味、私はイチゴ味と決まっている。未希だけは選り好みしないので、多分結果として一番食べて

いる。

「最近、そもそもおかしかったのではなくて、か？」

やはり美柊は紫のグレープアイスだ。

「最近？……言われてみれば、少し元氣無かったかも」

彼女が質問するという事は、興味を持っているという事。そして千里眼でも持つかのような切れ者の姉の質問は、ある程度自分で出した答えを確認する作業。

「私が前に会った時には、すでに彼女はおかしかったんだよ、未希」

「え？純夏が遊びに来た時って、一ヶ月くらい前ですよ？そっだ、神社の雰囲気 작품을創りの参考にしたいって言ってたから連れて来たんだ……」

その時に、私も彼女と出会っている。私はこの性格だし、ろくに話もしなかったが、美柊とは社史や神道の考え方などでかなり話し込んでいたようだった。

「気がつかなかったのなら、いい。おそらく彼女は明日、大学には来ないだろう。いや、来れないと言った方がいいか」

「またそういうシャーロック・ホームズみたいなことを……」

「ホームズか。そりゃあいいな。ただ私は、部屋でパイプをくわえているだけでなんでも当てられるほど器用ではない」

違う。確かにホームズはワトソンやレストレード警部の話を聞いてパツと真実を思い浮かべていたが、それはあくまで憶測であり、裏付けを取るために現場に赴いて実地調査を行っていた。彼は名探偵ではあるが、地道な捜査を蔑ろにしていた訳ではない。

……なぜだか私はホームズを擁護している。無口な方だけど、頭の中ではいろいろ考えてます。

「まあ、そっだとしても、まだ少し時間があるはずだ。手だてを考

えておこう」

「ちよつと話が早すぎてついて行けないんですけど。純夏に物の怪が取り付いてるんですか？」

物の怪。19の女子大生の口からひょいっと出てくる言葉ではないが、我が家では別に違和感はない。

「断定は出来ないが、可能性はあるという話だ。普通に大学に来ていれば、体調が悪いが、人間関係の問題だろう」

「はあ、そうですか……」

話は終わりだ、というように美柰は部屋を出て行ってしまふ。煙草を吸いに行ったのだろう。

「お姉ちゃん、私に出来る事ある？」

未希はちよつと疲れたような笑顔を見せる。

「ありがと。でも大丈夫だよ。それに物の怪が関わってるかもしれないじゃ、穂波実に危ない目に遭わせる訳にいかないもの」

「そんなの、気にしなくていい」

「そういう訳にはいきません。大事な穂波実が怪我なんかしたら、お母さんに合わせる顔が無いでしょ」

たまに未希はそんなことを言う。でも、お母さんはどんな人だったのか聞いてみても、

「うーん、優しくったけど、私も4歳だったからねえ。よく覚えてないんだ」

なんて苦笑いしている。

「姉さんは結構覚えてるよ。後、もちろんお父さんも。今度聞いてみたら？」

「いい。美柰お姉ちゃんは真面目に教えてくれないし、バカ親父は話したくない」

バカ親父の話をする時、私の顔は私が想像する以上に険しいのだろう。未希はいつも驚いたような、ちよつと泣き笑いみたいな表情になる。

「バカ親父なんて言わないの。お父さん、あれで結構苦労してるんだから。お母さんが早くに亡くなって、一番辛いのはお父さんでしょ？」

聞きたくない、と目をそらした。大嫌いなバカ親父の話なんて、大好きな未希からは余計に聞きたくない。姉はため息について私の頭を撫でる。

「ったく、変なところで姉さんの悪影響受けてるんだから……あ、煙草吸ったらダメだよ？」

それは大丈夫。煙草は嫌いだ。服と髪に臭いがつくから。

「お姉ちゃんのためならなんでもするから、言ってね」

本心だ。怪異に対してしか役に立たないこの力が、もし姉のために使えるなら喜んで使おう。

「うん、ありがと」

未希はそう言って力なく笑った。

穂波実視線（後書き）

ご精読ありがとうございました。

ドウシヨウ

暗い部屋で音が響く。冷蔵庫から漏れる明かりだけの部屋。その前にうずくまる猫背の影。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

暗くなってくると、まるで治る事の無い古傷のように右腕が痛む。そして、無性に肉が食べたくなってしょうがない。……それも、生肉を。

がつがつがつ。

昨日業務用スーパーであれほど買い込んで来た肉も、この分だと明日の夜までには食べ尽くしてしまう。

だが、彼女にはもう外に買いに行く事は出来ない。それほどまでに彼女の姿はすっかり変わってしまったのだ。

どうしよう、ドウシヨウ、ドウ……。

「ドオ……」

口から漏れる呟きが、少しずつ低くなって行く、そんなことにも、彼女は気がつかなくなってくる。あの心の黒いシミは、今や彼女のほとんどを塗りつぶさんとしているようだった。

太く、大きくなった右腕で、香華純夏は肉を鷲掴みにした

ドウシヨウ（後書き）

ご精読ありがとうございました。

河川敷球場

河原のグラウンドを気持ちのいい風が吹き抜けていく。

小気味の良い音を立て、ボールが佳佑のミットに収まった。軽い衝撃が左手に伝わる。

右手でボールを取り、軽く投げ返す。

「スーパークャーッチ！！」

幸平がなんでもないボールを取って大騒ぎしている。

彼は小学校の頃に野球をやっていたらしい。しかし高校までやっていた佳佑とは実力差は歴然。手加減して投げないと怪我をしよう。

「見たか、佳佑！新庄ばりのウルトラプレーを！」

「あれで新庄なら、俺はフリーザ倒せるわ」

「何をーっ！なら俺は金やんだ！！」

「いや、フリーザと金田正一って、比較にならないよね。そりゃ、

金やんは400勝だけでも、戦闘力53万は言い過ぎじゃないかな」

「ふっ、あの時代はスカウターが無かったんだ。150キロくらい投げてたかもしれんぞ」

「言つとくけど、スカウターって球速を測る道具じゃないからね。

スカウターは今も開発されて無いからね」

「ごちゃごちゃ言つてないで早く投げてこい！……って、ぬおあー！！いきなりシュートはズルいだろー！！っ！！」

思いっきり後ろにそらし、幸平が叫びながらボールを追っていく。

「カーブなんだけど」

したたる汗を拭って、ふとベンチを見る。グラウンドから生えた痩せたキノコのような、申し訳程度のベンチ。その上で、念入りにストレッチを行っている末希の姿がある。

「な、何もそんなに本格的にやらなくていいよ。試合じゃないんだから」

「ダメだよ。スポーツを甘く見ると大怪我するよ」

「いや、ってゆーか、ユニフォームかい……」

未希が取り出したのは、レプリカユニフォームだ。そう言えば未希の父親は「万年最下位」「プロ野球のお荷物」と言われて久しい地元球団モールズの大ファンだった。未希自身は人並み程度にしか野球を知らないようだが、きっとグッズには事欠かないに違いない。

「お父さんがいっぱい持つてるから。雰囲気出すために適当に見繕ってきたんだ」

チームの顔であるエース沢倉の名前と背番号が入っているユニフォームと真つ赤な帽子をかぶり、未希は笑う。

と、佳佑の目にデザインではない黒い模様が飛び込んでくる。

「未希、ちよつと待って……こ、これサイン入ってるぞ？」

「え？これ、サインなの？お父さんが酔っぱらって落書きしたのかと思ってた」

えへへと笑う彼女だが、多分それは、選んじやいけないユニフォームだったかもしれない。無邪気なのか、やはり男のロマンは女には分らないのか。

ボールが帰ってくる。

「お、未希ちゃん似合ってるよー！じゃ、始球式始球式！」

幸平がわざわざ扇の要に腰を下ろす。

「よーし！ピッチャー、御子神くん。背番号じゅーはち！」

「ちょ、だからサインユニだって……」

佳佑の言葉には耳も貸さない。なぜか甲子園の独特なウグイス嬢口調を真似ながらマウンドに登る未希。……野球帽の後ろから飛び出したポニーテールがやけに可愛い。

が、佳佑も幸平も見くびっていた。大きく振りかぶった末希の姿は様になっている。

「お……なんか本格的だぞ」

軸足に体重をしつかり乗せて、左足がキャッチャー方向へ踏み出される。抱え込むような左手のグラブの動きに連動して、右手がついてくる。

「げ……ちよつと、末希ちゃん、俺、素人……」

左足に体重が乗ったところで、振り切った右腕から白球がリリースされた。ボールを投げた事の無い人が肩だけで投げる、いわゆる女の子投げとはかけ離れた綺麗なフォーム。自然、球にも力が乗る。

まったく予想をしていなかった球速で、目を丸くした幸平のグラブにズドンとボールが吸い込まれた。

「す、すご……野球、やってたの？」

「ううん。キャッチボールだっていうから、ビデオ見て練習したの」

「あ、ああ、そう……」

ぼかんとする二人を見て、末希がしゅんとなって苦笑いする。

「あ、ゴメンね。やっぱりダメだよな？やっぱりちよつと練習したくらいじゃ、キャッチボールレベルにも行かないよね……」

「いや、キャッチボールどころか、ギニュー特選隊クラスなんだけど」

「ギニュー？」

この努力屋は、いつも佳佑の想像を超えてくる。そんな風に見えないのに、無駄に頑張っている。思わず笑みがこぼれてしまう。本当にカワイイヤツだな、と思ってしまう。

と、ふいにキーンと耳鳴りが鳴る。

時々前触れも無く鳴ったり、気がつくと消えていたり。耳鳴りの原理なんか知ったこっちゃないが、鬱陶しい事この上ない。

なんとなくその耳鳴りの原因がそっちにあるような、妙な不安を覚えて、佳佑は河原の住宅街に目を向ける。

香華純夏のアパートも、確かその辺だったはずだ。どうして未希を通してしか接点もない純夏のことを思い出したのか分からないが、言葉に表せない漠然とした胸騒ぎを感じたとしても言えない。

「佳佑君？」

「ん、何でも無い。暑さにやられたかね……」

河川敷球場（後書き）

ご精読ありがとうございました。

実は発泡酒

首筋を汗がつたう。

まったく、夏の湿気と来たら。これでは風呂に入った意味も無い。ドライヤーもそこそこに、美柰は冷蔵庫へと急ぐ。

「ビール、ビール……」

普段は満面の笑みなど見せないクールビューティ美柰の正体は、ただののんべえである。

「かーっ！ たまらんー！！」

「親父臭い」

「お、穂波実も飲むか？ うまいぞお！ この世の数少ない天国だ！」
気のせいかな、いつもよりもしらっとした視線で姉を見る穂波実。

「それ、何がおいしいの」

そんな醒めた言葉にも、美柰姉ちゃんは上機嫌でぽんぽんと背中を叩く。

「ふふふ、そんな大人びた態度を取っていても、やはり若いな穂波実ちゃん。こいつの味を覚えていくことが、本当に大人の階段を上る事なんだよ？ん？ほれほれ」

妹のほつぺたに缶をピタピタと付ける。妹は迷惑顔だ。そこではたと気がつく美柰。

「ん？ 未希はどこに行っただんだ？」

風呂に入るまでいたような気がするが。そう言えば夕飯を食べてから二階で調べものをしていたので、その間にどこかにかけたのか。

「ま・さ・か、愛しの佳佑君のところかあ？」

「美柰お姉ちゃん」

にかあっと笑う美柰に、予想通り穂波実が食いついてきた。その厳しい表情に、美柰のにやにやが増して行く。

「おお怖い怖い。まるで般若だな」

普段は鉄面皮の穂波実も、未希のこととなるとすぐに熱くなる。

「友達のところに行ったの！」

棘のある声が、美椰のスイッチを入れた。

「何？友達？誰だ？」

「知らない」

穂波実は拗ねたようにぷいっとそっぽを向くが、姉はその肩をつかんだ。すでにいつもの真剣な顔つきに戻っている。

「穂波実、まさか香華のところではあるまいな」

「そう。今日も大学に来なかったし、連絡も取れないからって」

鋭い舌打ちと、それ以上に鋭い視線。自然、手に力が入る。

「あのっ、バカ……！穂波実、出かけるぞ。香華のアパートの場所は知っているか？」

「わ、分かんない。お姉ちゃん、痛い……」

姉の豹変ぶりに、妹は眉をひそめる。

「ああ、すまん。お前に当たっても仕方ないな。よし、香華のアパートは私が調べておく。穂波実は車の鍵と、未希の刀を準備してくれ。式神も連れて行く」

「刀？式神？危ないの？」

「かなり高い確率で。急げ」

美椰が言うのだからほぼ間違いない、と経験で知っている穂波実には、バタバタとリビングを出て行く。それを見送る間もなく、美椰は携帯電話を手に取る。相手はもちろん未希だ。

出ない……出ない。留守番サービスにつながって、舌打ち。肝心な時につながらない、とはよく言ったものだ。

美椰の調べた結果では、おそらく純夏はそろそろ発症してしまっている頃だ。だから明日当たり行ってみるつもりだったのだが。未希のお人好しな性格を分かっているながら、迂闊だった。

二人目は、出た。夜に不釣り合いな明るい声。

「岩戸か。香華純夏の自宅を知っているか？」

実は発泡酒（後書き）

ご精読ありがとうございました。

聞こえますか

純夏の家までは電車で二駅の距離だ。電車に乗っている時間よりも、むしろ神社から最寄り駅までの方が時間がかかってしまう。

夜、小さな街頭しか無い河原の道を一人歩いていると、さすがにちよっと心細い。そう言えば佳佑の家も近くだったと思う。

今度遊びに行つてご飯でも作つてあげようかな。貧しい食生活っばいし。……穂波実は怒るだろうけど。

このあたりは川に隣接しているので、元々あまり開発が進んでいなかった地域だ。最近は近くに新しい大学が出来たことを受け、学生の需要を見込んで土地を馴らしたらしい。まだ空き地も目立つ。

物の怪。姉の話では、そんな人ならざるモノが純夏に憑いている可能性が高い、という。未希にしてみれば、そのくらいの話では驚かないし、さして珍しくもない。体が重いか、最近悪い事ばかり起きるとかいう人がよく神社にお祓いにやってくるが、半分くらいは実際に憑いているからだ。それは霊的なモノであつたり、狐や狸のいたずらだつたりもする。

が、親友に憑いていて、しかも大学を休むほど体調を崩しているというなら話は別だ。一度調べてみて、可能ならその場で祓つてしまふ事にする。

「一応連れて来たけど……ここまでは必要なかったかな」
パーカーのポケットに忍ばせた式神の札を握りしめて、一人苦笑い。

未希はこの時点で、そんなつもりはなくても、無意識に相手をみくびっていた。自分だけで大丈夫だろうと、鷹をくくっていたとも言えなくもない。

河原の道をそれて、すぐ。純夏が暮らすアパートが見える。全部で六部屋しかない二階建てのこぢんまりしたアパート。その一階の左端の部屋が、純夏の部屋だ。

アパートの窓を見る限り、純夏の部屋を含め全て部屋の電気が消えている。誰もいないのか、空き部屋なのか。とりあえずチャイムを押すと、やや間の抜けた音が中で鳴っているのが聞こえた。

一回では反応がない。二回、三回と押してみる。

「出かけてるのかな……」

もし外に出られないほど体調が悪いのなら、と思って差し入れも持ってきたのだが。置き手紙でも残して、置いて行こうか。

諦めて踵を返した時、中から気配がした。

「っ……！」

瞬間、未希の背中を悪寒が駆け抜ける。

いや、悪寒なんて生易しいものではない。思わず身を強ばらせてしまうほどの強烈な気。

父や姉を手伝い、それなりに除霊経験を積んできたつもりだが、これほどの『凶気』にお目にかかったことはまだ無い。鳥肌が立つ。

いる！

かなり強い負の概念を纏う『何か』が、このドアの向こうに居る。蒸し暑い夏の夜のはずなのに、冷たい汗が背中をつたって行く。さっきまでなんでもない景色だったはずが、今はまるで質が違う。

急に純夏のことか心配になった。この中に彼女がいたら……おそろくただでは済まない。

大きく深呼吸してから、ドアノブを回す。鍵はかかっていなかった

た。

あれだけチャイムを鳴らしておいて今更だが、それでも息を殺さずにはいられない。

確か純夏の部屋の造りはシンプルで、ドア、廊下、八畳間と縦長だったはずだ。

真っ暗な部屋。中の様子をうかがいながら、そっと忍び込む。

がつがつがつ。

妙な音。

距離にして3、4メートル先だろうか。暗闇の奥から聞こえてくる。

この部屋で物音を立てるのは、主である純夏だけだ。なのに、未希は声をかけてあげられない。

聞こえますか（後書き）

ご精読ありがとうございました。

この声が

ピンポーン。

耳障りな音を、純夏は無視した。

がつがつがつ。

目の前の肉を喰らう方がずっとダイジ。

いくら食べてもこの大きくなッた体は満足を知らナイ。暗い部屋の隅に置かれた鏡が映す彼女の姿は、ヒトのソレデはない。

ダが、よカッタと思フ事もアル。

目が良くナッた。眼鏡はどコニ行くにも必須だったのニ、今八暗闇ノ中だってヨク見えるし、チャント獲物を殺スタメの鋭い爪も生えタ。

ピンポーン。

純夏はそれを無視した。

今はカヲ溜めナキヤイケナイ。

スグにあノ陰陽師カブレノ親友を殺すために戦ワナキヤダメだカラ。

キットあいつハ抵抗スル。我ヲを悪鬼ト呼び、倒すタメの力を使ウ。

ソレに耐え、アノ忌まワシき敵ヲ確實ニシトめル。

ピンポーン。

無視した。

アイツはイツモイツモ私ノ邪魔ばかりシテ……ダカラ、私は力を得タ。ソウ、アイツヲ殺スタメノ。

ドアが開く。

ナンダ？ 誰カイルノカ？

この声が（後書き）

ご精読ありがとうございました。

鬼

闇に目が慣れ、それが浮かび上がってくる。未希はジーンズのポケットから携帯電話を取り出し、印籠のように液晶画面の明かりを向けた。

そして、息をのむ。その風体は、おそらく東アジアで最も有名で、最も危険な部類の怪異。

様々な呼び名は着いているが、一番有名なのは「鬼」だ。

筋肉の盛り上がった背中、ゴツゴツした皮膚、そして耳まで裂けた口から覗く無数の牙。

「ちよつと、な、何、これ……？」

自分の目が信じられない。純夏が住んでいるはずの部屋には恐ろしい形相の異形、正に鬼がいた。しかもそいつは今、大量の肉塊を驚掴みにして、口に放り込んでいる。

日本では、古来から鬼の伝説には事欠かない。地獄の番人、災厄の使者、人をさらい喰らう悪鬼。

鎖国時代には漂流した外国人を鬼と見間違えて恐れた例もあったようだが、無論、赤毛の外国人が漂着する以前から、鬼は存在した。日本が狩りをしていた時代にも、中国、インドの文献には鬼が登場し、やはり人に災いをもたらす存在と紹介されている。

とりあえず冷静になること。なんだって落ち着かなければ始まらない。テストだろうが試合だろうが鬼退治だろうが、大切なのは平常心だと自分に言い聞かせる。一つ息をつくと少しだけ落ち着いた。混乱するな、未希……今は目の前のことに集中……。

鼓動を落ち着かせ、何をすべきか考えを巡らせる。

まず頭によぎるのは正義感。この鬼が町中に逃げたら、間違いく死人が出る。

次によぎるのは無力感。

身体能力は並大抵のものではないとの知識くらいはあるが、今実物を見てよく分かった。力の差は歴然だろう。一人で殴り合っただけの相手ではないことは、確かだった。

「ダレ……？」

鬼が放つ、風邪で喉をやられたようなだみ声。変わってはいるが純夏の声だ。

つまり純夏が鬼と化している、それは間違いない。しかし彼女が生きているのも間違いない。驚愕とほんの少しの安堵。

「純夏！」

「ミ……キ……？」

液晶画面が放つ弱々しい光を映し、不気味な眼光が未希を捉えている。

「純夏、何があつたの？……純夏？」

これは、かなり浸食が進んでいる。まだまともに話ができるだろうか。

床にべたつと座っていた異形が、のそつと身を起す。あの小柄な純夏が、こんなごつごつした体のラインな訳がない。

「ミ……キ……！！！」

ぐつと体を縮める鬼。それが跳躍の前段階だと判断する前に、未希はドアから飛び出していた。慌てて閉めたドアに巨大な体躯がぶつかり、蝶番が激しく悲鳴を上げる。間一髪。

「純夏……ッ！どうして、こんな！？」

禍々しい気配を背中に感じながら、河原に向かって走り出す。がこんがこんとドアを激しく揺さぶる音。もはやドアを開けるといいう知性も失ってしまったのか。

獣の咆哮。

突如、携帯電話が鳴り出す。心臓が止まるかと思ったが、それでも走る事はやめない。電話は姉からだった。

『未希！無事か？』

鋭く、落ち着いた声。電話でもほつとする。

「姉さん！純夏が、鬼に憑かれてます！」

『分かつてる。もうすぐ着くから、なんとか逃げ切れ。やれるな？』

「河原に行きます！あそこなら人もいないでしょうし」

そんなことをとっさに考えついた自分にも驚いたが、美柊の怒鳴り声にも驚いた。

『この、ツバカ！自分の身を第一に考えろ！町の中の方が隠れやすいだろうが！』

美柊の気持ちは嬉しいがしかし、あの鬼が町中に行ったら、完全にパニックだ。そして、純夏の体に乗っ取った今のアイツなら、ためらい無く人を襲うだろう。

「式神も居ますから！やってみます！」

これ以上は電話をしながら走っている余裕は無い。ドアが弾け飛ぶように開く音が聞こえたのだ。アスファルトを噛む爪の音も。

『未希！無茶だけはしてくるな！』

「はい！」

電話を切って、背中にすさまじいプレッシャーを感じながら、河原に飛び出す。

「わっ！？」

暗さで踏み外し、堤の上からダイブ。下が柔らかい草で助かった。そのすぐ上を、凶気が通り過ぎて行く。今落ちなかったら危なかったかもしれない。

「おいで！」

素早く式神札を放り、小さく祈りを込めて呼ぶ。次の瞬間には、未希の横に巨大な黒猫がいた。行儀よくおすわりしている猫の体長

は、それでも未希の身長と変わらない。

とは言え、その猫の存在はどこか現実感に乏しく、二次元的にのっぺりとしたものだ。どこぞの運送会社のマークに描かれている猫に似て、デフォルメされたようなシルエット。

「またよろしくね、クロ」

黒猫だからクロ。これは未希が勝手に付けた名前だ。

にゃーごと間の抜けた声で返事をして、クロが鬼の方へ跳躍する。猫らしいしなやかな体の動きで鬼の向こう側へ降り立つ。挟み撃ちの格好。

純夏「だった」鬼が吠えた。

鬼（後書き）

ご精読ありがとうございました。

河原へ

美柰からの電話の内容は常軌を逸していた。

未希が鬼になった純夏に殺されそうになっているから、お前が困になっても助けろ、という内容で、佳佑にはまったく理解できなかった。

が、質問や反論をしている場合ではなさそうだ。いつもの冷静な美柰の声だが、それでもかなりの緊迫感が漂っていた。それに友達が豹変する現場だって、ついこの間立ち会ったばかりだ。

「岩戸。計らずも、君も原因の一つだ。あまり話している時間はないが、要約するとだな……」

美柰の説明を受けて、佳佑はアパートを飛び出す。

確かにあの説明じゃ、そりゃ自分も原因かと思ってしまう。

個人が何も関わっていないとしても、関わり合いを望まない生活を送っていても、いつの間にか関わり合いを持つのが現代だ。余談だが、関わり合いを望まないから、逆に縁を強く感じるのもまた現代だ、皮肉なものだろう、と美柰は締めくくった。

香華純夏の家ならそんなに遠くない。一度だけ未希に連れられて行った事がある。

一つ、覚悟を決めようか。いつまでもだらだらとした友達関係でもいいが、そうじゃない雰囲気は漂っていたんだから。

河原の道を走っていると、奇妙な生き物の声が大気を振るわせる。

河原へ（後書き）

ご精読ありがとうございました。

鬼の目にも涙

咆哮。

恐ろしさと同時に哀しみを感ずるのは、まだ純夏の意識が鬼に残っているからだ。これならまだ完全な状態で純夏を助ける事が出来る、と踏む。

「純夏！飲み込まれちゃダメだよ！」

つなぎ止めようとする未希の声。返事をするように、凶悪な殺気がほとばしる。未希の想いとは裏腹に、鬼の体が前方に弾けとんだ。それは、必殺の一撃だった。純夏を助けたい未希は、どうしても純夏を傷つけたくなかったし、この期に及んでなるべく穏便に済ませたかった。

そんな未希の想いを全て無視する鬼の一撃。身の丈2メートルを越える筋肉の塊が、人の常識では考えられない距離を一瞬で詰めてくる。そして、大上段から振り下ろされる鉤爪。その一本一本が、未希の腕ほどもある。

金属がぶつかるような音と、今まで感じた事の無い風圧、衝撃。とっさに後ろに飛んだ事と反射的に突き出した結界札で、未希の命はつながった。すぐにクロが牽制に入り、鬼の気を散らす。

「し、死ぬかと思った……。あれ？」

右肘から先がしびれて動かない。あの一撃を防いだと思えば軽い代償かもしれないが、そう割り切れたもんでもない。

「純夏め、元に戻ったらケーキバイキングおごらせてやる！」

左手でポケットをまさぐる。結界札の手持ちは後二枚。分かっているが、現実は厳しい。

「本当はこれで純夏を助けるつもりだったんだけどな」

走りながら苦笑い。今ではこの二枚をどんなに有効に使っても、なんとか鬼の二撃を防げるだけだ。しかも体の一部を犠牲にして。

「愚痴つても仕方ない、か」

自分でなんとも出来ないこの状況では、援軍を宛てに時間稼ぎしか方法が無い。情けないが、逃げ回るしか無いのだ。

「クロ、君だけがたよりだよ……」

距離を取ったつもりだが、あの跳躍力からするとどこまでが安全な距離なのか。せめて武器があれば牽制くらいはできるのだが、無いものはしょうがない。

「ないないづくしだなあ、もう！」

式神とは意識下でつながっているから、こちらから改めて指示を出す必要は無い。クロはすっかり主の意図を感じ取って、忠実に鬼を翻弄していた。おそらく彼の本気であれば、戦い慣れていない鬼を殺してしまうことは可能なのではあるが、それをやればもちろん純夏も戻らない。

月夜の川で、魚が跳ねた。その場違いな光景に、未希は一瞬だけ目を奪われ、その乱れがクロにも伝わってしまう。

正に一瞬の間。

クロを引き離し、鬼は未希の下へ跳んだ。目の前に降り立つ巨大な影。

「や、やば……純夏、ちょっと、落ち着いて……」

今更、愛想笑いが通用するような相手でもなかった訳で。

うーん、これはまずいかもなあ。美椰姉さん、穂波実の事よろしくね。ああ死ぬ前に佳佑君に会いたかったなあ……。

刹那、割り込むように男の声。

「香華純夏!!」

その声の主を探すように、鬼の動きが止まった。その間のお陰で、後ろから追いつがったクロの猫パンチが間に合う。鬼が巨体を揺らしながら吹っ飛んで行く。

「未希! 無事なんだろうな!」

その声の主の姿を街灯の下に認めて、未希は戦慄すら覚える。

「な、なんで佳佑君がここに……!?」

「美娜さんから電話もらった。罔になっても未希を守れって、さ。

…… 右手、怪我したのか?」

目の前で暴れる鬼を見てなお自分のペースを崩さない佳佑に、未希はもう卒倒しそうな気分になる。

「姉さん、貴女って人は……ッ!! 佳佑君、危ないから逃げて! あ
の鬼、殺す気満々なんだから!」

「そう聞いたらますます逃げてらんないだろ。なんか俺も原因の一つらしいし」

「佳佑君が原因?」

が、佳佑は歯切れが悪い。

「ま……詳しくは美娜さんに聞けよ。それよかアイツ、大丈夫なの? なんかこつちに向かって来んだけど、さ」

「げ……」

思わず息を飲んだ。クロを振り切り、純夏が爛々と目を輝かせて走ってくる。手持ちの札で二人を守ることとは出来ない。

にもかかわらず、未希は不思議と絶望していなかった。先ほどまでのイライラも消えている。恋ってのはこういう事なのかもしれない、なんて場違いに考える。

「佳佑君、ごめん。ちよつともう、どうしようもないかも」

これもまた場違いな苦笑いを浮かべると、佳佑はただ、ああと頷いた。

「任せとけ」

クロがしつこく追いついて、純夏が足を止め、うるさそうに手を振る。

「未希」

佳佑は厳しい表情で鬼と式神の戦いを見つめている。

「何？」

「俺のこと好きか？」

「……は？」

たっぷり間を置いて、未希の目が点になった。

突然、何を言ってるんだこの人。

「やっぱ一応、自主性を尊重しないと」

「ななな何を言ってるの！？意味分かんないよ！」

「分かるだろ。ちなみに、俺は未希のことが好きだ。なんかね、いつの間にか惚れちゃったみたいで。いやそりゃ最初から、かわいい子だなとは、もちろん思ってたけど、さ」

少し照れた様子。

対する未希は。文字通り、絶句。こんな状況で、こんなところで、どうして告白なんて事になるのだ。これは完全に死を覚悟したということなのか？死亡フラグなのか？

い、いやいや、それより今、佳佑はなんと言った？自分の耳を疑ったのは、いつ以来だ。穂波実がカレーに常軌を逸した量の七味と胡椒をかけて美味しそうに食べていた時以来か。いや、あの時疑ったのは耳ではなく、目と穂波実の味覚だ。あれはひどい光景だった。

「未希、あんま時間無いぞ」

「は、はい！？」

現実に戻ると、再び純夏の咆哮。強烈なダツシュ。

「フラれた時は別の方法考えてるから、返事聞かせて」

「そ、そんなのめちゃくちゃだよ……」

なんでそれとこの状況の打破がつながっているのか、どうしても理解できないが、佳佑が冗談を言っているようにも思えない。

「お、おい、そろそろヤバいって。もっかい言うぞ。俺は未希が好きだ。未希は？」

迫り来る鬼にどんな秘策を用意していると言うのか、佳佑の横顔に焦りが浮かぶ。

佳佑が自分の事を好きだと言ってくれたのは意外だったし、最近無かったくらい嬉しい。ちゃんと女の子として見ていてくれたということだし。

で、佳佑の事は、それは好きなんだけど、こんな形で想いを告げていいものかとも思う。でも、ここで「返事はまた今度」って選択肢も無さそうだ。

追いつめられた未希は、視界がぐらぐらと揺れる想いで、叫ぶように声と息を放った。

嬉しそうに笑う佳佑。

「オッケー。じゃ、誓いのキスね」

佳佑の顔が近づいてくる。もう何がなんだか分からない。

とにかく、目の前で見せつけられた鬼は、つまり純夏は完全に勢いを失った。さっきまでの迫力が嘘のように、ぽかんと立ち尽くしている。

まるで熱に浮かされたような未希の意識が戻る頃、佳佑は未希から離れ、その鬼を見上げていた。

「わりいな、香華。俺はお前の気持ちには答えてやれない」

「そういうことだ。自分の気持ちくらい、自らの口で語るべきだったんだよ」

間髪入れずに続ける声。耳に馴染んだやや低めの女性の声で、それは間違いなく美柰の声だ。間に合ったんだ。

いろいろな世の理を無視して、ペなペなのお札が一直線に飛んで

くる。大丈夫、自然をねじ曲げるのは美槲の得意技だから。

お札は、そのまま鬼の頭に張り付くと、激しく光って鬼の体を包んで行った。

ともだち

「見せつけられちゃったなあ……」

「あ、あれは、違うんだってば！」

「違くないよ。それが佳佑君の想いだから。そしてそれこそ、私を止めてくれた気持ち」

「むむう……元はと言えば純夏がいけないんですよ。勝手に勘違いして、勝手に鬼になったんだから」

「ふふ……そうだよ。私が一番驚いてるんだよ。鬼になるなんて、学芸会でもなかったもの。でも結局、私の行動が岩戸君と未希を本当につなげたんだから、随分間抜けな話だよ」

「う……そうならそうと、相談してくればよかったのに」

「言えないよ。二人とも大事だもん。この気持ちはお墓まで連れて行こうって、本気で思ってたんだから」

「純夏……ありがとう」

「ダメだよ、未希。やっぱりもう未希とは会わせる顔が無い。私は、未希がいなくなれば、岩戸君が自分のものになるかもしれないって、心のどこかで思ってたってことなんだから。私、地元に戻るよ……」

「何言ってるの！私も佳佑君も無事だよ！純夏がどう思ったって、そうならなかったから問題ないでしょ！ほら、あれじゃん！自分の中で考えてるだけだったら、憲法だって保障してくれるんだって！」

「でもね……」

「私は気にしてない。ねえ純夏、誰にだって、誰かを恨んだり妬んだりしたことくらいあるよ。そうじゃない人間なんていないって、思う。だってそうでしょう？私は今まで、何度もあったよ。お父さんだったり先生だったり友達だったり姉さんだったり、早く死んじやったお母さんを恨んだ事もある」

「……」

「そんなもん、こうやって誰かに話しちゃえば解決するんだよ。し

かも知良い事に、私たちは知らない仲じゃないもん。それどころか、親友でしょ？それで分かり合えないはずなんか無い！違うかな？…

…あれ？変なの、涙、出てきた」

「未希……」

「だから、心配しないでよ。こんなことくらいで純夏の事嫌いになつたりしないよ。また鬼になるんなら、何度だって戻したげるから！そのための力なら、私にはあるもの」

「うん、ごめん、未希。だから泣かないで」

「純夏が泣かせたの！もう、止まんないや……」

「未希……ありがとう。私、幸せ者だね」

ともだち（後書き）

ご精読ありがとうございました。

みなぎおねえたん

結局、何がなんだったのかよく分からないまま、私はまたリビン
グでイチゴアイスをほおばっている。

鬼になってしまった香華先輩は、美柰お姉ちゃんの特製札で邪気を完全に払われ、元に戻った。完全に体力が戻るのには少しかかるようだが、また日常生活が送れるだけで万々歳だ。

未希お姉ちゃんのケガは右手の打撲だけで済んだらしく、今は疲れて眠っている。

岩戸先輩は、終わった後にすぐ帰ってしまった。『穂波実ちゃん、これから仲良くしてね』なんて泣きそうな顔で言い残して。意味が分からない。

美柰お姉ちゃんは……目の前でビールを飲んでいる。

「くはーッ！一仕事終えた後のビールはまた、たまらん！穂波実も

……」

「いらない」

付き合いきれない。半眼で睨む。

「うまいのに。いいさ、一人で飲むから。いつかは穂波実とも酒を酌み交わしてみたいものだが」

それはしばらく無いだろう。そんなことより、

「お姉ちゃん」

「なんだ、その説明して欲しそうな目は。まあ確かに穂波実は今回、あんまり出番が無かったからな。全体像がつかめなくとも無理は無い」

好きで出番が無かった訳じゃない。

「でもな、世の中何でも教えてもらえらと思ったら大間違いだ。自分で調べる事も重要だ。苦労して覚えた事は忘れにくいと言っただろ

う？」

違う。セリフは真面目だが、この高説を垂れるような口ぶりは決して『姉の真面目』ではない。また私をからかおうとしている。

「特別に教えてやらんこともないが、一つ簡単な条件を出そう」

「条件」

姉は嬉しそうににんまり笑う。酔っている。よくよく考えてみると、さつきから何本空けているんだ、この人？

「そうだ。どうだ、やるか？」

「何を」

「それを言ったらおもしろくもなんとも無いだろう。教えて欲しいんだろ？全部分かりやすく、この美柰お姉ちゃんが丁寧に解説してやるぞ」

意地の悪い笑顔は、いつものお姉ちゃんと言えば、お姉ちゃんだけどそんな挑発に乗るほど、私は愚かじゃない。

「じゃ、いい」

「はああああ？穂波実いゝ、愛想が足りないなあ。もっと自分の新境地を開拓してみたいと思わんのか」

今度は一転して不機嫌そうにぶーぶーと拗ね出す姉は、まるで手がつけられない。面倒になってきた。だいたい、何を開拓させる気だったんだ。

「お休み」

「ちよちよちよ！ちよつと待て妹よ！もう寝るのか？今時小学生だつて起きてるだろう。もう少し付き合え」

「寝てるよ。もう12時回ってるもの」

「明日休みだろう？まだいいじゃないか」

「木曜日。普通に学校。お姉ちゃんと違って、早起きしなきゃいけないの」

とどめを刺してやると、口を筆記体の「E」みたいにしながら缶ビールに手を伸ばす。あ、よく見たら発泡酒だ。経費節減って、こういう事か。

「ちえ〜っ。いいいいいよ。私は一人淋しく飲むから。小さい頃はみなぎおねえたんって言いながら無邪気に遊んでくれたのに、ああ、月日は無情だなあ。みなぎおねえたんは可哀想だなあ……」

「お休み」

最後にさらっと冷たい視線を送って、階段を上がる。ちょっと飲み過ぎだ。まったく、誰に似たんのか。

みなぎおねえたん（後書き）

ご精読ありがとうございました。

虚空に消えることば

何本目か分からない缶ビール……発泡酒をあおりながら、美柊は鋭い視線をテレビに向けていた。その目に穂波実とじゃれていた時の気だるさは全く無い。

くだらない番組を垂れ流しているテレビを睨み付けながら、美柊の心にはテレビ以外の理由で波風がたっている。

「香華純夏は一目見た時から岩戸佳佑にぞっこんだった。しかし彼女は親友の御子神未希が、岩戸佳佑と付き合っていると思い込んでいた」

テーブルクロスの模様を指でなぞりながら、いなくなってしまう穂波実に説明しているように独り呟く。

「あの鬼はそんな彼女の想いが歪みきつた末に現れた、この世の亡霊とでも言えるかもしれん。……想い人を奪うため、女を殺すことを決意した嫉妬に狂う鬼。さしずめ平安時代の橋姫と言ったところか。だが、問題は正にそこだ」

人の強い想いは古来から様々な怪異を成してきた。その善し悪しの程度の差はあれど。

しかし現代。

それは言うなれば、人類が自ら積み重ねて発展させた「科学」に支えられた時代。

「もつとも、科学とて自然の摂理を知り、人の良い様に利用するという点では、魔術や霊的なものと何ら違いは無いがね」

テレビの中。どこかで見たとようなコメディアンが狂ったように馬鹿笑いしている。名前は思い出せない。

「とにかく、この信仰心の薄い時代にあって、だ。呪術や霊力と無

関係の女子大生香華純夏の想いだけであの凶鬼を呼び出せたか、と言う疑問」

答えは無論、ノーだ。奥手な女の淡い恋心程度であんなことになっていては、社会は大混乱だろう。例えばどんなにその想いが鬱屈しても、向かうところは最悪ストーリーカーや何かの犯罪だ。しかもあれほどの強力な鬼の具現化。相当な手間隙をかけなければ、美柊とて容易ではない。

「桁違いの霊力を持つ何かが彼女の意識に介入し……」

同じような想いを遂げられずに死んだ靈魂を凝縮して純夏に憑依させた。

「その可能性が非常に高い。と言うか、ほとんどそうだとしか考えられん。それが、問題だ」

CMがあけても、コメディアンの笑いは止まらない。それこそ何かに取り憑かれてしまったかのように見るに絶えず、電源を切る。

「天狗、いるか」

煙草に火をつけて、何かを呼ぶように囁く。

「変わった事は？……そうか。ならいい」

誰もいない、何も聞こえない。が、美柊は呟きを続ける。

「いや、それはいい。下手を打つとお前が消されるぞ」

リビングは禁煙だったなど、ふとそんな事が斜めによぎって消えて行く。

「私が調べてみよう。お前は少し警戒を強くしておけ。変わった事があれば教えてくれ」

空き缶に吸い殻を放り込む。美柊はそれっきり呟きを辞め、静かになった部屋でため息をつく。

「私だけでは荷が重いかもしれんぞ？バカ親父」

虚空に消えることば（後書き）

ご精読ありがとうございました。

とりあえずこの回はここで終わりになります。チラリとでも呼んで下さった方々、読むに耐えない悪筆の嵐の中、ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

続きはそのうちアップしたいと思いますが・・・書けるかなw

封印（前書き）

久々の再開で、新章突入wです。以前より更新頻度は遅くなると思いますが、よかったおつきあい♪

封印

風に秋の気配が漂い始めた頃。夕暮れが終わった時間。

人通りの無くなった住宅街の道を人影が進む。

彼の足取りは重く、まるで自らの影を引きずるようにして歩いて行く。その痩せこけた顔つきと空虚な表情は、一見して正常な精神状態ではないと分かる。

「はあ……はあ……」

よれたワイシャツとしわの寄ったスラックスをまとい、ただひたすら前へと進む。

やがて彼は、小さな公園にたどり着く。住宅地の一角に作られた奇妙な形の公園。それは公園の方が住宅地よりもずっと古くからこの町に存在していたことを示している。高層マンションの敷地内に建っていた古い鳥居を撤去せず残すように、区画整理後も敢えてその場に残された公園。

小さな公園の隅に朽ちかけている小さな祠が、その理由である。錆びついた低い鉄柵が、わずかばかりの緑とコンクリートの世界とを隔絶するただ一つの境界。

明かりが無いために、公園の全体を見渡す事は出来ない。しかし彼は迷う事無く公園の一点、祠を指す。

この時点で、彼の体は限界に近づくかのように軋みを上げていた。今にも転びそうな不安定な足取りで、それでもよたよたと草を踏み分ける。締めりのない笑みを浮かべる口元からよだれを垂らし、生氣を失った目には不気味な光を宿しながら。

対称的に、彼の体からほとばしる力が強さを増す。

彼が歩んだ後には甲高い虫の声さえ、風に溶けて逝く。彼が踏みしめた草は、すぐに生気を無くして茶色く枯れてしまう。

その小さな祠は実にお粗末な古いものだったが、その見てくれに反して、邪悪が近づけぬよう幾重にも封印が施してあった。

「へへ……へへ……」

力の無い、狂った笑い声がひゅーひゅーと漏れる。祠の封印を何の遠慮も無く破り捨てて行く。触れるたび、自らの手がひどく焦げ付くのも気にならないかのようだ。

無我夢中という言葉はこの瞬間のためにあるのかという時間が過ぎ去り、指先から血が噴き出すと、もう彼の手は間もなく手としての機能を失う。そんな頃、最後の封印を破り捨て、祠の観音開きを力任せにぶん殴る。

大きな、嫌な音がして、右手と木の扉の両方が壊れた。凶気は止まらない。

暗く些末な人の世の隅に忘れ去られた祠の主は、しめ縄を巻かれた石。そしていつまでも輝きを失わない宝剣。

祠の中に足を踏み入れ、彼は倒れた。足が終わりかけている。むしろここまで良く保ったと言うべきなのか。

腕の力だけで這い進む彼には、もはや人間と呼べる理性や知能は残っていないように見える。

木の板すら、ぎいぎいと嫌な音を立てながら彼の侵入を嫌がっている。それでも男の命を張った最後の前進は止まらない。

残った左手が宝剣をつかみ、石に覆いかぶさって、彼は笑う。二千年に及ぶ封印を解くために、笑う。血と煤で汚れた男の顔の奥に白い歯が覗き、さらに向こう側からはそんなものよりもずっと黒い声の塊が次々と溢れてくる。もはや笑顔とも呼べない闇に飾られた壮絶な幕切れが、すぐそこにある。

それは彼の意志なのか。意思があるのだとすれば、彼はまだヒト

なのだろうか。

左手は、別の生き物であるかのように宝剣を振りかざす。彼の、
生物学的にはまだ生きている、血の通う首をめがけて、彼の左手は
??。

聞こえた咆哮は、誰の歓喜の声だったか。

秋が近づく夜の空に、虫の鳴き声に戻る。

封印（後書き）

ちよつと怖め？w

赤いワカメ

「全然、秋来なくね？太陽先輩、マジで元気じゃね？」

赤いワカメこと栄幸平が、いつも通り岩戸佳佑の横でうだっている。いつも通りの死んだ魚の目。

「いや太陽先輩もそろそろ家に帰るだろ。もう五時だし」

「お前は分かってねーよ。先輩は最強なんだよ。これから地球の反対側でまたメンチ切りに行くんだよ。アメリカとか行くんだよ。で、明日また日本に來んだから。不眠不休のすげー先輩なんだよ。ああこそ、あちいな。先輩、お盆休みで実家帰んねえかな」

太陽がお盆休みでは、あつという間に地球は滅亡だ。

「今日は頭冷やさないのかよ」

「なんか、噴水の水って汚いらしいよ。そーいやカラスとか水浴びしてるもんな。キレイな訳、ないよな。生え際後退したら困る」

真っ赤に染め上げた髪の毛が、佳佑に無言の抗議をしているようだ。

大学は長い夏休みに突入している。院生や工学部の研究熱心な学生、秋の文化祭の準備に余念がない学生などを除いては、ほぼ人影はない。

それだけで見慣れた構内も違った世界に見えてくるから不思議だ。

考えてみれば小学生の頃なんか、夕暮れの校舎にいつもとは違う奇妙な感傷を覚えたものだった。

人が少なくなった教室や校庭を少数の仲間達と独占しているような優越感、夜が忍び寄ってくる恐怖、先生にどやされる若干のスリ

ルと、日の入りとともに始まる「何か」に対する期待、わくわくする胸の高鳴り。

まるでドングリを運ぶ小さな神様でも出てきそうなあの風景を、ノスタルジーと言っのだろうか。

二十歳を迎え世間的には大人になった今だつて、そんな気持ちを失った訳ではない。絶対に人には言わないが、魔法でも使つて空を飛べたらと夢見る事はあるし、木のトンネルをくぐったら神様たちの世界だつたりして欲しいし、せめてサントグらいいはいても良かった。そんなくらの夢ならいくつになつても持つていたいじゃないか。……背伸びしたような現代風のこの空間に、さすがにドングリ運ぶ神様はないか。

「佳佑君、幸平君！お待たせ」

もう一日も終わるのに、それを感じさせない明るい声。律儀に幸平の名前までまで呼ぶこの人なら、顔を見なくても誰だかすぐ分かる。

「ああ、女神はいたっけ」

「はあ？何それ？」

相変わらず困つたような表情で苦笑いしている未希。

愛嬌のある笑顔と、背中までのばした黒髪が彼女の特徴。古くから続く神社の次女である未希は普段は大和撫子なのだが、人に仇成す超自然現象に対しては、大きな対抗力を有する巫女さんだ。

夏休みの講義棟にわざわざ出てきた彼女は、ゼミの課題だかなんだかで集まつて勉強会を開いていたらしい。なんとなくやる事が無くて、サークル棟に行ったのに誰もいなくて、誰かが置いて行つた薄汚れたスーパーファミコンでマリオカートにハマつていた二人とは大違いだ。

「のろけやがつて……俺も混ぜろ」

「やなこった。太陽先輩に紹介してもらえ」

「だから、太陽先輩は硬派なんだよ。ナイフみたいに尖ってんだつてだよ。女なんか紹介してくれる訳ないでしょ」

「あれ？太陽先輩、もしかして高校生？」

未希だけが、頭の上にクエスチョンマークをいくつも浮かべて苦笑いしている。

「いーよいーよ。後はお二人さんでどこでも行つてなんでも楽しめよ」

立ち上がつて背を向ける幸平。

「あら？飯食いに行かねえの？」

「俺だつて約束の一つやふた……一つあるんだよ」

「しょ、正直すぎるッ！」

「うるせ。未希ちゃん、コイツに騙されて変なところ着いて行つちやダメだよ。ケータイは110に発信残して、履歴からいつでもかけられるようにしておくこと。すぐに警察につながるからね。いざと言つ時安心でしょ？」

「う、うん、そうする」

未希が緊張した面持ちで頷いた。

「そんじゃ」

夕焼けに去つて行く幸平を二人で見送る。

「なんだよ、変な気使いやがつて。らしくねえなあ。……ちょ、ホントに110番履歴残さなくていいから。何？俺、何者？」

赤いワカメ（後書き）

ご精読ありがとうございました。

願い

世の中、腐った連中が多すぎる！真面目に働こうとしている連中には仕事が無くて、今まで散々私腹を肥やしたジジイどもには、定年後の職場が用意されてるって？

必死に生きてる連中とは関係ないところで世界の動向が勝手に決まって、参加したことも無いマネーゲームの敗者にされるって？

……そんなことずっと前から言われてる？じゃあ、なんでお前は何も行動を起こさないんだ？それじゃ、お前も腐った連中と同じじゃないか！

俺は殺る。俺の住み良い世界に作り替えてやる。

手始めに、この町のヤツらをぶっ殺そう。で、徐々にいつまでもてっぺんであぐらを掻いてるあの大都市に近づいていこう。地方を疲弊させているの元凶の癖に「日本の中心」なんてちやほらされて、ああム力つく。

けれど、何かする時に一番モノを言うのは、経験だ。人生というスパンで見ても、人がこの世の全てのことを経験できる訳じゃないが、それでもいろいろケイケンしておいた方が後々役に立つ。

幸いこの町にも弱いヤツはたくさんいる。頭のおかしなオヤジも、ホームレスも軽い女も普通の学生もたくさんいる。

レンシュウして、ケイケンしなきゃ。まだたった15人。もっといっぱいいっぱいころそう。

願い（後書き）

続きます。

刑事一課長の憂鬱

相楽慶次郎は額に浮かぶ汗を拭いながら、写真数枚と睨めっこしていた。

うだるような熱さが、警察署内を支配している。一応備えられているはずのエアコンはしかし、県の厳しい財政事情の中「経費節減」という大義名分の下に出番を減らされ、今ではその存在は伝説にすらなろうとしていた。それもそのはず。庁舎内全般に通じるエアコンのスイッチを握っているのは、交通課でもこの刑事課でも無く、天下の会計課。よほどのことが無い限り、有名無実と化したエアコンの出場機会はない。

そんな訳で今日も窓全開、ほとんど吹いていない自然風に頼りながら汗だくで仕事をしている。こんなことでは仕事の能率がガタガタになりそうなものだが、そういう融通は一切きかず、精神論で乗り切るのが警察という古い組織である。要は気合いだ。

「まったく、なんなんだ……」

熱さに拍車をかける厄介な殺人事件。手の中に治まる写真が、相楽一課長の頭痛を激しくしていた。そもそもこんな地方都市のさほど大きくもない警察署の管内で殺人事件が起こるだけでも珍しいのに、この猟奇性。午後には県警本部から応援がやってくるほどの重大な事件。

「無茶苦茶じゃないか。これ、どうやるんだ」

課長席の前に立つ早瀬係長に問う。

「そうですね。木っ端みじん、とは言い過ぎかもしれませんが……とにかくこんな死体は、私も初めて見ました。ちよつと理解できません」

早瀬は中年にしてはすらつとしていて、実年齢よりも若く見える。しかしベテラン刑事である彼の経験は、相楽も買っている。その彼も、彼より経験の長い相楽自身も、こんな異常な死体を見たのは初めてだった。

夜中、当直員から自宅に電話がかかってきて、相楽は眠い目をこすりながら現場に赴いた。『署から自宅に電話』の時点で重大事件発生なのだとすぐに分かったが、まさかこれほどとは。

現場でまず目についたのは、若い刑事が道路の影で嘔吐する姿だった。四月に刑事になったばかりとは言え、それほど柔ではなかったはずだが……。

そう思いながら現場に入つてすぐ、相楽は彼の心情を理解した。

被害者の通学路だったガード下の細い道は、真っ赤なペンキをぶちまけたようだった。いや、ペンキとマネキンだったらどれほど良かったことかと思う。

ちぎれた死体には右手と肩、そして半分になった頭しか残っていない。何をどうしたらこういう壊れ方をするのか、見当もつかない。船に荷積みする大型クレーンの稼働域に入り込んでしまった労災事故の被害者でさえ、ここまでの損傷はなかったというのに。

問題は、損傷だけではない。無くなった部位はどこに行ったのか。現場以外の付近には何の痕跡も残されておらず、犯人がどちらの方へ逃げたのかすら不明だ。だいたい犯人が持ち去るにしたって、こんなめちゃくちゃな切り取り方をするのだろうか。文字通り、見当もつかない。

「人間技じゃない」

そう言いたくもなる。

「大型の肉食獣に食いちぎられたような、正にそういった感じですね」

溜息が漏れる。どうしてこの町にそんなものがあるのか。

隣接署の管内では猟奇殺人が発生し、その後も行方不明者が相次いでいる。そいつがいつこちらの管轄内にも現れるのかと気を揉んでいたというのに、輪をかけて異常な事件が起きてしまった。……猟奇性だけ見れば同一犯だと疑ってもいいのかもしれない。

「かわいそうに。まだ高校生なんだろう？」

「県立一高の二年生ですよ」

もはや顔が判別不能なほど損傷しているので、通学鞆に入っていた原付免許からの推測段階だが、数日中には本部の科学捜査研究所から正確な解答が届くのだろう。

女子高生が残忍極まりない方法で殺されたセンセーショナルな事件だけに、すでにマスコミが大騒ぎしている。警察としては、市民の不要なパニックを避けるために死体の損壊状況は公表していないが、噂が立つのは時間の問題だろう。

「解剖の結果待ちだな。暑いところすまないが、周辺の聞き込みは続けてくれ。望み薄だが、目撃者でもいれば……」

規格外の事件だが、結局はいつもやっている捜査を地道にこなすしかない。それこそが真実への唯一の道なのだと、もう亡くなった大先輩の言葉を思い出しながら、相楽はため息をついた。

こんな事件は、神主をやっている兄の両分なのではないかなどと、思わず本気で思ってしまう。

「いや、それは言わない約束か……」

独りごちて思い直す。

罪の無い若い命がこんな死に方をしていい訳がないのだ。正直な話、この仕事についていると、救う価値のないように思えてしまう鼻持ちならない連中が思ったよりも多いことに、否応なく気が付いてしまう。

しかし、この娘が真正正銘の「被害者」であることは疑いようがない。そして、被害者にならって無念を晴らすのが刑事という職業。

例え相手がなんであれ。

刑事一課長の憂鬱（後書き）

ご精読ありがとうございました。

彼氏と彼女の事情

佳佑がストローをくわえたままで言ったので聞き取れなかった。

「佳佑君、行儀悪い。何言ってるか分かんないし」

「香華はもう元気になったの、って聞いたんだ」

大学近くのカフェ。普段は聞かないジャズが耳に心地よい。

空がオレンジになっても、いつまでも暑いからと逃げ込んだのだが、少し冷房が効きすぎていて、今度はちよつと寒い。

「本調子とは言えないけど、大体は」

ストローで氷を弄びながら、気乗りしない様子で答える末希。

「そつか。それなら良かった。あれ以来会ってないから、さ」

あれ以来とはもちろん、鬼の一件だ。

美椰の処置が良かったのだろう。後遺症も無く持ち直した純夏だが、人前に出るのがまだ少し怖いらしい。特に佳佑に会うのは、まだしばらく時間がかかりそうだ。

元々積極的な性格ではないし、自らの弱さが招いた災厄だという後ろめたさが強いのだろう。決して純夏のせいではないのだが、自分を責める彼女を見ているのは辛い。

「まあ、やっぱり俺とは会いつらいのかな」

「そうだね。普通じゃないことになっちゃったから……。でも、純夏はむしろ被害者なんだよ？」

末希は親友の事を本気で心配している。それが分かっているから、佳佑も笑って頷いた。

「分かってるって。俺はなんとも思っていないから。悪いのは香華に鬼の力を与えた黒幕なんだろ？……でも、誰なんだろうな、その許せないヤツ」

美椰は今の時点では分からんと、それだけしか言わない。しかしあの人の場合、それが本心なのか偽っているのか、佳佑や末希には皆目見当がつかないのだ。本当に分からないのかもしれないが、美椰なら何かシツポをつかんでいるんじゃないかという思いもある。

末希が思い詰めたような顔でアイスコーヒーを睨んでいると思ったら、

「私を狙ってるのかも」

なんて言うから、思わず佳佑は吹いてしまった。

「そりゃ考え過ぎだろ。自意識過剰ってやつだな」

「ひ、ひどいなあ……だって、そうかもしれないじゃん」

拗ねた表情もかわいいなあと思いながら、佳佑は更に笑う。

「なんで？」

一応尋ねておくと、彼女は真面目に言う。

「神社って、神様が時々降りてくる休憩所みたいなもんなの。伊勢神宮とか、由緒あるところは常駐してるらしいけど」

神様常駐って、もつと言い方があるだろお前とツツコミたくなるが、それが末希のセンスなので我慢する。

「結構あつちこつちに神社ってあるでしょ？無人になってるところもあるし。でも神社とかお寺って、明治時代以前にはもつと日本各地にいっぱいあったんだって。それを明治政府が統合して整理したらしいの」

狙われる理由までは大分遠そうだが、女性の話なんてのはそんなもんだと黙って聞く事にする。

「聞いてる？」

「き、聞いてるよ」

油断も隙もない。

「でね、その時に歴史の無い神社とか形だけの神社は結構潰されちゃったらしいの。だから、今残ってる神社って、それなりに由緒正しい神社なんだよね」

「ああ、それで？未希んちも由緒ある神社だって……自慢話か！？」
「こらえきれずに「なんでやねん」」。

「違うつてば。佳佑君もこの前見ちゃったから疑わないと思うけど、物の怪とか妖怪とか、そういうのは少なくなっただけどちゃんと居るんだ」

佳佑とて、それはもう認めざるを得ない。あれだけ見せつけられて信じない方が信じられない。

「あそこまで悪さするのは珍しいけど、ちょっとした悪戯なら結構あるんだよ？ど忘れとか、典型的。でね、その土地の怪異を抑える役目をするのが、神社だったりお寺だったりするの」

未希はまるでレンタルしてきた映画のDVDが失敗だったかのような、そんなゆるい調子で言葉を紡ぐ。疲れているのだろうか。

「うちも、本来の役目はそう。会った事無いけど、曾おじいさんの時には結構強い物の怪との戦いもあったんだって。九尾の狐とか」

「いや、ちょ、きゅ、九尾って、あの有名な悪い狐？俺、現代生まれでホントよかったな……」

さらっとそんな名前が出てくる会話に、やっぱりジャズは似合わない。

「なるほど。この土地を守ってる神社を攻撃しようっていう妖怪がいるかも、って話か。だから未希が狙われてるかも。そういうこと？」

疲れたような口調で「ピンポン」と口を尖らせる。

しかしそんな話を聞かされても、佳佑にしてみれば実感がわかない、というのが正直なところだ。進路の悩みとか、嫌なヤツがいる

とか、そういう話なら慰めも励ましも出来るのだが。
簡単に「大丈夫だよ」と言うのも違うような気がする。かと言っ
て、付き合っただけでもない彼女の悩みを無下にも出来ない。

逆に佳佑が悩んでいると、未希がくすくす笑う。

「そんなに真剣な顔で悩んでくれなくてもいいってば」

「ん？そんなにマジな顔してた？」

「うん」

それもちよつと恥ずかしいな、と。

未希にしてみれば、佳佑が自分の突拍子も無い話を受け止めてく
れた事が嬉しかった。親族以外では、初めてこういう事を相談でき
る人が出来たかもしれない。それだけで幸せなんだ、と思う。

「何にやにやしてんだ？さっきまでビビってた癖に」

佳佑のぶっきらぼうな口調は、照れ隠しだ。

「まあね」

未希はそれが分かっているから、含み笑いを浮かべたままですト
ロ―を吸う。

「美柳さんがなんとかしてくれるよ」

「うん。でも、姉さんだけに押し付けてられないから」

「じゃ、俺も手伝う。穂波実ちゃんが許してくれれば」

あの冷たい半眼を思い浮かべ、佳佑は苦笑する。

「穂波実は佳佑君の事を嫌ってる訳じゃないよ。そんなに子どもじ
やないから」

「だいたいけど」

苦笑いを浮かべながら、その裏で「御子神家を狙う物の怪の可能
性」については少し心配な佳佑だった。

彼氏と彼女の事情（後書き）

ご精読ありがとうございました。

御子神穂波実という人（前書き）

設楽 要 したらかなめ

穂波実のクラスメイトで親友。

御子神穂波実という人

学校帰り。設楽要の横でかわいいくしゃみをする友人。

友人?? 御子神穂波実は、ぴょんと跳ねたツインテールの髪型と言い、小柄な体躯と言い、独特なキャラと言い、きつと一部のマニアにはたまらない仕様に出来上がっているのだろうが、もちろん本人には自覚が無い。

「風邪？」

「違う……と思う」

尋ねても最低限の単語しか返さないこの子は、クラスでは少しだけ浮いた存在だ。そりゃあこんな不思議な雰囲気的女子、なかなかいるものではないし、なにせ本人が口を開かないんだから仕方の無い事だろう。

でも私は知っている。彼女は一部の生徒が言うようなただの無愛想ではない。本当は誰にでも分け隔てなく接する優しい人だが、その接し方がちょっと人とは違うだけだ。

入学して間もなく、穂波実は確かに取っ付きにくい雰囲気だった。

小さな学区で固められた中学校よりもグンと広がる交友関係に、始めは誰でも緊張する。彼女もその類いなのだろうと思っていたが、それは勘違いだった。初めて会う者達が集う高校一年生の一学期の異質な雰囲気のクラスにあって、穂波実だけが普段通りだったと、私は思い知る。

入学して一週間ほどした頃。自己主張の強い女子二人が、クラスを二分しようかという派閥を造り上げていた。置いていかれたくない一心の女子達が積極的に闘争参加した結果、短期間での派閥構成とあいなつたのである。

理解できない男子達は冷めた目でそれを眺めていたが、女子としてはこれからの高校生活がかかった、死活問題だ。身の振りを間違えば女子特有の陰湿ないじめの標的にされ、普通の生活さえ危うくなる。

無論、互いが互いの勢力を拡大するために限られた資源を奪い合う。

もちろん自分から意思表示なんか絶対しない穂波実も、なんとなくうんざりしていた私も、取り込みのターゲットに選ばれ、両派閥からしつこく勧誘を受けることになる。

そしてある日、彼女は両方の長から直々に勧誘を受ける事となった。

「御子神さんは、アタシとアイツ、どっちに着くのかしら？ま、考えなくてもどっちが良いかなんて分かるわよねえ？」

そこいらの男子よりも体格のいい女番長Aが、ポキポキと指を鳴らす。

「こんな野蛮な方に、クラスの平和が維持できて？暴力に訴えるようでは先が知れています。これからは頭を使って生きていくべきよねえ？」

いかにも優等生タイプだが、キレるとヤバそうな女番長B。

タイプの違うドン二人が穂波実の机を挟んで睨み合う様は、正に一触即発のムードを醸し出していた。

私は、その様子を教室の隅から観察していた。その時は名前も

る覚えで、あの追い込まれたようなツインテールの後ろ姿に同情したものだ。彼女は、雰囲気にもまれて座ったまま声も出せずに小さくなっている被害者そのものだったから。クラスの誰もが彼女に同情していたに違いない。しかし助け舟を出すほど勇気のある者もない。……結果として、それは勘違いだったのだが。

勝手に喋り続ける二人を、穂波実是最終的に泣かせた。

ヒートアップしてつかみ合いになりかけながらも返事を迫ったところで、穂波実がすくと立ち上がったのである。表情を少しも変えずに、彼女は二人の後頭部に手をかけた。

「へ？ちよつと……？」

戸惑う二人に、穂波実は冷徹に告げる。

「仲直り」

犬猿とも言うべき二人の声が重なり、水と油とも言うべき二人の額が穂波実によって「こんにちは」をさせられた。

その時のゴツンツという音は、今でもはっきりと私の耳に残っている。

「ば、暴力も頭も使ったな……」

呆氣にとられた男子生徒が思わず呟いた言葉を、私はめざとく聞いていた。

怖い者知らずなのか、イツちゃった精神の持ち主なのか。派閥云々ではなくその場の全員が啞然として動けなかったのをよく覚えている。

痛みと下克上ショックで泣きじゃくる二人を前にしても、彼女の表情はなんにも変わらなかった。職員室に連れて行かれる時も。

けれど唯一、親の代わりに学校に呼び出された年の近いお姉さんが来た時だけは、少し反省したような顔つきをしていた……ような

気がする。

結局、彼女の活躍？で派閥は解体し、クラスの雰囲気はそれまでのピリピリしたものから、和やかなものに一変した。現在まで一度も派閥復活の機運が盛り上がらないのは、彼女の存在が大きいのかもしれない。あの穂波実自身は心の底から興味が無く、あの一件も後で尋ねたら「横でうるさかったから頭に來た」と解説してくれたほどで。

その時から私はこの子を素直に面白い子だと思い、友達付き合いを始めた。初めこそ微妙な表情の変化を読み取るのに努力を要したが、穂波実の方もうるさい私を避けるような事もしなかった。

事件を機に話しかける生徒も増えていたのだが、そもそも彼女が人を邪険に扱っているところを見た事が無い。あの元番長二人でさえも拒みはしなかったのだから。

彼女はつまり、最初から誰も拒んでいなかった。

御子神穂波実という人（後書き）

ご精読ありがとうございました。

設楽要という人

くしゅん。

再びくしゃみをして鼻をすする穂波実。横を歩く設楽要が明るい笑顔を向けてくる。

「ほら、風邪じゃん。それとも誰かの噂？穂波実なら誰かの噂になつても全然不思議じゃないし」

「……」

むつとしながらも言い返せないあたり「普通ではない」という自覚はあるんです。

「いい意味で、だよ？」

取り繕うような言い方ではなく、あくまでこちらを持ち上げるのが、要というキャラクターだ。

「どんな意味」

「穂波実、人気あるじゃん！」

無愛想な表情を崩さないまま、どこかと吐き捨てる。本心だ。人付き合いは得意じゃない。美柳お姉ちゃんにも、もう少し笑いなさいって言われたし。

これじゃ敵は作っても好意はもたれないだろう。……そういう意味では要は貴重な存在だと言えるかもしれない。どうしてこんな私なんかに構ってくれるのか分からないが、とにかく感謝している。

「あゝ知らないな？この間、綾瀬が穂波実の事聞いてきたんだよ？お前、御子神と仲いいよな、とかつつつてさ」

意地悪く笑って、はやし立てるようにこのこのとほつぺを突つかれる。だが、記憶をひっくり返したところで、私には思い出せない。

「綾瀬って誰」

「お、おいおい……バスケ部期待のホープだってば。スポーツ万能のイケメンだからね。天は二物を与えたのかって言われて騒がれて……まあ、穂波実には関係ないか」

それが穂波実のいいとこだけだね、と笑いながらため息をつく要。要こそ。男子の友達多いでしょ」

「まゝね。性格が男よりだからさ、あたしは。めんどくさいの嫌いだし、細かい事苦手だし、おおざっぱだし。乙女街道を地で行く穂波実とは正反対だな」

「どこの街道……？」

にひひと笑う要は、いつもニコニコしていて本当に羨ましい。私にもその十分の一でも愛想があれば、と思う。

「じゃ、また明日ね。寄り道しないで、真っ直ぐ帰るんだよ」

茶化すように笑って、彼女は十字路を右に行く。私は左だから、いつも要とはここで別れる。

突然、何の前触れも無く脳裏を何かが駆け抜けた。例えるなら電気のような、予感。それも、戸惑うほどに疑うことのない嫌な予感。「ッ！？要、ちよつと……」

言いようのない不安に駆られて、思わず要を呼び止めてしまう。

「ん？何？なんかおごつてくれるの？」

突然呼び止められてなお、彼女は呑気な笑顔で返事をしてきた。

……気のせいだ。具体性の欠片もないこんな気まぐれで、彼女に何を言えいいのか分からない。

「何でもない。気をつけて」

「はあ？そんなこと言うために人を呼び止めるとは……」

大げさな動作で額に手をやって、大げさに溜め息をつく要。

「穂波実も相変わらずよく分かんねー。ま、いいや。穂波実こそ、知らないオジサンに着いてっちゃダメだぞ？じゃあね」

意地の悪い笑みとともに人差し指を立てて見せてから、要は背を向ける。なぜだか、その後ろ姿に妙な胸騒ぎが止まらない。

原因が分からないまま、私は十字路を左に折れる。

設楽要という人（後書き）

ご精読ありがとうございました。

母の記憶

紫煙をくゆらせながら、美柵は眼鏡を外す。古い本を机に置き、煙をたつぷりと吐く。煙と薄暗い部屋に差し込む夕陽が、気怠い夏の午後を加速させていくようだ。

読書用の眼鏡をかけて渋い表情で古い本を読みあさる彼女は、まだ見ぬ叡智を探求する学者のようだとも、古代に失われた秘術を研究する魔女のようだともとれる。どちらにせよ、彼女の疑問に答えが出る気配はなかった。

「どうも、いかな」

普段でもややハスキーな声色を二割増で低く呟き、灰皿に煙草を押し付ける。斜陽にくすぶる吸い殻の鈍い光が、集中力を失った美柵の脳を走る電気信号のごとく弱々しく明滅し、中空に消えた。それを機に本を閉じ、嘆息を吐き出す。

ここ数日で感じるようになった気配。覗きだとかストーカーの類いならまだ対処の仕様もあるが、そういう具体的な雰囲気を持たないモノ???「思惟」とも呼ぶべき何かが、この神社を中心に街を巡っている。この上なく漠然とした話だとは自身でも思うが、人の微妙な感覚を言葉にすると、途端説得力を失って行くものだと、彼女は承知している。

「敵意、か？」

今感じる中でもっとも妥当と思われる言葉でさえ、口にした傍から胡散臭さをたつぷりと含んだ現実感の無い虚無として、煙とともに霧散した。

東洋・西洋問わず様々な怪異について片っ端から調べ、あるいは現地で体験してきた美娜だが、分からないことは当然のごとく多々存在する。それはただ知識として知らないということだけではなく、そもそも怪異の根本が生者の意義と異なることが多いからだ。彼ら??性別すら正確ではない??はこちらの世界よりも激しく観念的で、実体としての存在がとても危うい。

それ故、感情の生き物たる人間が彼らを感知することは極めて難しい。

人間は進化の代償に動物としての勘を失ったと、さも残念そうに唱える者もいるが、美娜は反対の立場だ。失ったのではなく、それを自ら棄てた。それこそ「進化」と呼ぶべきものではないだろうか、と美娜は考える。

動物のように真っ直ぐにモノを見ることが出来たなら、若しくは機械のようにのべつまくなしに世界を捉えることができたなら、彼らはとても近い存在となっていただろう。そして結果的に、この世はもつと混沌としたものとなっていただろう。概念・観念的存在と、人の業やそれによる戦争などはよく混ざり合わさる。呪術や魔法などによる争いは、政治的に調整される核戦争と違い、個人レベルで簡単に破滅を呼ぶ恐ろしい手段となり得てしまう。

それを予期していたか偶然かは分からないが、人は進化の過程で選択した。

見なくていいモノ、感じなくていいモノは見ない。

それこそが、人の進化だと美娜は思う。

ならばそれを感じ取ることが出来てしまう御子神一族は、進化を逆行する野生の家系か、はたまた過去に失われた力を取り戻したハイブリッドヒューマンなのか。

横道に逸れて行く思考を止め、少し痛むこめかみを抑えた。と、ヒグラシの声を割って、廊下を歩いてくる足音が聞こえる。泥棒の類いでなければ、今この家にいるのは未希だけだが。

「姉さん、いる？」

開け放たれた障子からひょいと顔を出す妹。すでにエプロンをしているところを見ると、どうやら夕飯の準備中に母屋からやってきたようだ。

「うーん…どうしふあ？」

眼鏡を取り、固まった体を思いつきり伸ばしながら返事をする、あくびも同時に込み上げてきて、ひどく間の抜けた声が出る。やや呆れた様子の未希が、腰に手を当てて溜め息をついた。

「若いのに、またそんなお父さんみたいなの…」

未希は美柳のガサツすぎるところを嫌う。無論、美柳とて女だからということもあるが、その影響を穂波実が受けることを心配している節もある。

「むしろ親子だからだろう。それが血のつながりというものだ」

「そんなこと言っていると、結婚できないよ？」

良く出来た妹は姉の将来も案じてくれているようだ。

「ご心配痛み入るが、そもそも私は結婚などというものに興味は無い。御子神家の血筋は未希と穂波実に託すとするさ」

余裕しゃくしゃくで返す美柳に何も言う気が失せたか、未希は一つ溜め息をついた。

「姉さんもちゃんとしてれば美人なのに…」

「ああ、それは世辞でも嬉しいな。そんなことより、何か用ではなかったのか？まさかそんなくだらない用事のために来た訳ではある

まい」

「半分はそうかも。椅子で寝てたら風邪引くんじゃないかと思って」

肩をすくめつつも相手を思いやるこの表情、誰かに似ている。

「ふむ… 未希は誰に似てそんなに気が利くのだろうな。いや、母親譲りか」

何気なく思い当たった答えがふと口から漏れると、未希は少し驚いたように、そして少し淋しそうに瞳を揺らす。その表情にすら、亡き母の面影を見出してしまえるほどだ。

彼女が4歳の時に病死した母、御子神里歌。美柰はその時すでに11歳だったから、おぼろげな母の像を結んで懐かしがる未希よりも、まして生まれたばかりだった穂波実よりも、しっかりと記憶に残している。ちゃんぽらんな父親と、その父に近づいて無愛想になっていく美柰を、母はいつも優しい笑顔で見守っていた。

その微笑みは、散って行く花びらを想起させるような儚いものだった、と今は思う。子どもながらに何か別れの予感めいたものを感じとっていた美柰だったが、それはきつと母親の体が弱かったせいだけではあるまい。

言うならば、そう、彼女は呪いを受けていた。

「姉さんだってお母さんの子どもでしょ。母親譲りか、なんて変なの」

まるで他人事みたい、と未希は笑う。なるほど言われてみればその通りだが、美柰自身は彼女の中に母から譲られたものなど見つけれないのだ。結論だけ言ってしまうえば、美柰は父親似で未希は母親似。それだけのことだ。穂波実は…… 半々だと言ったら、父親を認めない彼女は怒るだろうか。

「そうだな。どれ、私も何か手伝おうか」

何気ない家族との会話が、先ほどまで考えていた事柄の鋭さをより増したように思えて、美柰は腰を上げた。しかし未希は腰に手を当てて苦笑いを作る。

「い、いいよ、テレビでも見てて。……その、姉さんの味付けは独特だから」

「ん？世界を飛び回って料理を研究した末に完成した、一つの成果だと考えて欲しいな」

実際は、どこに行っても便利なインスタント食品ばかり食べていたような気がするが。

「いいの。ここは日本なんだから、日本の、我が家の味付けで」

「……嫌われたものだ」

母の記憶（後書き）

ご精読ありがとうございました。

陰

人の進化の証は「忘れられることだ」と誰か偉い学者先生が言っていた。人が最も幸いなのは「忘れること」で、最も不幸なのは「忘れること」だどこかの何かに書いてあった。

詰め込むものが多い学生にとって、忘れることは厄介だ。忘れなければテスト前に大慌てでおさらいする必要は無いし、ポケットの軽さに気が付かずに駅まで歩いて、券売機の前からダッシュでトンぼ返りする必要も無い。夕飯のレシピメモも、雨上がりに取り残された傘も、きつとこの世から消えてなくなる。

総じて、忘れなければ単純に脳の機能に限界が来るということなのか。それとも悲しすぎて立ち直れないような出来事すら少しずつ薄めてくれる、という感情的な意味合いか。前者の立場から見れば、確かにこの世界は情報量が多すぎる。後者の立場から見れば、確かにこの世界は悲しいことが多すぎる。

設楽要は、こう思う。

人が忘れて行くのは必然だ、と。繰り返しの日常の中で、記憶することすら忘れていくのではないか、と。そしてたまにその人にとって大きな出来事があると、その衝撃は些末な日常の記憶をさらに吹き飛ばしてしまう。

更には忘れることを選択できる記憶と、できない記憶がある。深く深く刻まれた記憶は、脳に病的な傷害がでない限り、あるいは障

害を負っても、忘れることは叶わない。

喜び、悲しみ、憎しみ、絶望。どんなに時が風化しても、忘れ得ないことがある。彼女は今日、それを知った。

いつも通りの日常。いつも通り穂波実と別れた後の帰り道。いつも通りの高校から実家までの帰り道。いつも通りの……いつも通りはどこまでだったのか。

悪い夢でも見たことの無いほどに酷い光景の後、気が付くと彼女は全身で息をしながらしゃがみ込んでいた。ここはどこなのか分からないし、今日が何日なのか、今が何時なのか、もはや自分が誰なのかもよく分からない。

忘れたい。今すぐ忘れたい。

これまでの人生と引き換えにしても、今日を忘れたい。

道の真ん中にへたり込んだ要の肩を掴んで誰かが揺すっているが、要は応じない。その視線は力なく宙を凝視し、歓喜も苦悶も恐怖の表情さえも浮かべていない。

やがて救急車が到着し、近くの橋の下でソレを見つけた誰かの悲鳴が上がり、相楽の部下達が血相を変えて現れても、要は救急車の中でただ放心し続けていた。

陰（後書き）

後精読ありがとうございました。

野球回

テレビでは今年も最下位に甘んじる地元チーム、その名もモールズの野球中継を放送している。

相手は現在リーグ首位のサンズだが、投打ともに圧倒的な力の差をいかになく発揮されている状況だ。なるほど、太陽とモグラではそもそも相手にならない。と、言うかなんであんな弱そうな動物をチーム名にしたのだ、このプロ野球チーム。

佳佑は缶ビールを飲み干しながら、今日何回目なのか分からないモールズのピンチを眺めていた。小さなテーブルの上にはコンビ二で買ってきたおつまみ、それを挟んで向かいには幸平が同じように赤い頭と顔でテレビを見ている。

モールズのマウンドを守るのは、ナイターなのに空が明るいうちにKOされた先発投手でも、燃え盛る火に油を注ぎ倒した二番手でも、ゴジラに潰された石油コンビナートよろしく爆発炎上した三番手でもなく、早い回から敗戦処理を任された入団二年目の若手ピッチャーだ。気の毒な役回りだが、彼がマウンドに上がってからは相手のスコアボードにゼロが刻まれ続けている。そんな彼の意地もここまでなのか、テレビに映るその背中では視聴者から見ても分かる程にバテている。そして墨上は埋まり逃げ場はどこにも無いが、監督も動かない。

「かわいそうに……」

思わず佳佑が同情するほどに。

「もう変えてやれよ。コイツ、よく頑張ったよ。こんな大差で負けてんのに、俺ちよつと泣きそうだよ」

思わず呟いた幸平の言葉が、視聴者とスタジアムにいるモールズファンの総意だろう。まるでクラスで一番遅い周回遅れの子がゴールする瞬間のような空気。

しかし野球の神様は容赦しない。そういう場面で、バッターボックスには、現時点で三冠王の4番バッター。貫禄が違う。

解説者は「もう失うものはない訳だから、開き直って投げられればね」なんて勝手なことを言っている。彼からすれば予想外のマウンドに上がった時からとくに開き直っているに違いない。が、いかんせん疲れ果てている。バッターが悠然と見送った変化球も、ほとんど変化していないし、ストライクゾーンに放れたのも奇跡に近い。まして相手は目下絶好調の三冠王。見逃し方から見ても、球筋を完全に見切られている。

彼は敢えて見逃したのだ。次の一撃で確実に粉碎するために。

「フルカウント……コントロールできる球はへつぽコストレートだけか」

投手経験者の佳佑の見立て。

「フォアボールでもいいんじゃないの。そしたら代えてくれんだろもう一点とられたって、こんだけ点差が開いてたら関係ないだろ」

幸平の感想は正しい。そりゃそうかもしれないが。

「それでも。投げるんだ、ピッチャーは」

正面から投手をとらえた映像の中で、彼はうなずいた。キャッチャーとのサインの交換が終わった合図だが、もう意味は無い。今の彼の球威では、おそらくバッターはどんな球にでも対応してくるだろう。弱いチームだったとは言え、高校で投手をやっていた佳佑にも、多少は分かる。どうせやられるなら、一番自信のある球で勝負

するしかない。後は気持ちの問題だ。

言葉通りに開き直りきったピッチャーがモーションに入った。

腕の振りの勢いにしては力の無い球が、スラッガーの振り抜いたバットに食われ、白球が糸を引く。

「ああああ……」

打った瞬間ホームランコースの弾道に思わず声が漏れるが、そこからモールズ今日一番の見せ場だった。

高い高い放物線を描いたボールは、なんと逆風に負けて押し戻されてきた。ボールの滞空時間が長いだけに、俊足で有名な外野手はすでにフェンスの下で待っている。それでも足りないと感じた彼は、ひょいっとフェンスによじ上り、精一杯にグラブを伸ばし？？確実にフェンスの向こう側に飛び込んでいったボールは、しかしスタンドにたどり着く前に彼のグローブに収まった。

「おおおおおおあつ！？」

一瞬の間の後、佳佑、幸平、観客席、実況から歓声が上がる。スパーキヤッチを見せた外野手が大写しになり、フェンスの上でスタンドの味方ファンと大喜びしている。

「すげえ！助けられたな！」

幸平が呟く間にも、ベンチに帰ってくる味方に頭をこづかれ照れ笑う若手投手と、その彼が外野手を迎え入れるシーンが映し出された。

「やっぱ諦めたらダメだな！」

「いや、もう試合展開にはまるっきり影響無いけどな……」

なぜか涙ぐむ幸平に呆れる佳佑の目に、ニュース速報の文字が飛び込んでくる。

「男女のバラバラ死体発見って、嫌なニュース速報だなあ。しかも近くじゃん」

かーっと声を出してビールの缶を握りつぶす幸平。

「そんなもんでいちいちビビるんじゃないよ、ったく。ところで佳佑、玄関の鍵は閉めたか。窓もそろそろ閉めてもいいんじゃないかな？」

「窓閉めたら暑いだろうが。そこまでビビらなくてもいいだろ」

「何何何！？俺がビビってるってえ！？ちよつと佳佑君、そいつあ勘弁して下さいな。おお俺の明鏡止水をそんなことで乱せるものかよ、ちよいなあ！？」

「うるせえよ！めっちゃくちゃビビってんだろっが！」

「ビビってねえって！ビビってねえけど今日はここに泊まることにするから。いいだろ。な、いいと言ってくれ。俺がバラバラになつてるとこなんて見たくねえだろ」

「言ってることはバラバラだけだな」

「いや、うまいこと言わなくていいから。ただ泊めてくれるだけでいいから。佳佑君、俺を見捨てないでくれえええ！！」

「うるせええええ！！！！」

幸平を足蹴にしながら、佳佑は別のことを考えている。最近ちよつと考えすぎてるみたいだし、あとで末希に電話してみようか、と。今度の日曜は気晴らしにどっか連れて行くか……。

テレビではモールの先頭打者が、早くもしょんぼりとベンチに帰っていくところだった。

野球回（後書き）

ご精読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1978n/>

御子神家の(非)日常

2011年9月20日03時20分発行